

仙台市文化財調査報告書第13集

南小泉遺跡

範囲確認調査報告書

昭和53年3月

仙台市教育委員会

「南小泉遺跡」正誤表

ページ	誤	正
P 24 第8図	2. スクレーバー	2. スクレーパー
P 49 図版1	1-Na.3	1-Na.1
" "	2-Na.4	2-Na.2
P 50 図版2	1-Na.1	1-Na.3
" "	2-Na.2	2-Na.4
P 61~P 78 1行目	器面調成	器面調整

仙台市文化財調査報告書第13集

南小泉遺跡

範囲確認調査報告書

昭和53年3月

仙台市教育委員会

序 文

南小泉遺跡は、現在の市街地の東南にあたりますが、仙台平野のはば中央に位置しており、仙台地方に人々が定住して農耕を始めたのがこのあたりだともいわれております。

仙台駅前からバスで約20分、現在では市街地に近い住宅街として生まれ変わろうとしている南小泉遺跡のはば中心地と思われる遠見塚古墳一帯が昭和48年公有化されました。現在は史跡公園をつくって市民に親しんでいただこうと環境整備を進めています。しかしながら、これを包括する南小泉遺跡の実態が個々の資料でのみ明らかにされているだけであり、南小泉遺跡の姿が不明確な点もありました。

幸いにも今年度、国庫と県費補助を受け、南小泉遺跡の実態調査をする機会を得、また東北大大学、東北学院大学そして地元の皆様のご協力も得ることができ、無事、報告書作成までこぎつけることができました。いろいろ制約もあり、十分な内容になっていないかとも思いますが、一つの資料として本書が活がされれば一応の目的は達成できたと思っております。

本書へのご批評をお聞かせ願うとともに、今後とも仙台市の文化財行政へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

昭和 53 年 3 月

仙台市教育委員会 教育長 佐藤 敬

例　　言

1. 本書は国庫補助事業（総額2,000,000円）による南小泉遺跡範囲確認調査の報告書である。
2. 本報告の内容は、遺跡の概要、調査の経過、学術的記録と若干の考察を含む。
3. 本文の執筆担当は次のとおりである。全体の監修は仙台市文化財保護委員である伊東信雄氏が行なった。

伊東信雄……II-2
結城慎一……I、II-1、III-1、III-3、IV、V、VI-3 (3)
丁藤哲司……III-2、VI-3 (1)、(2)
4. 本報告書に掲載した図面のトレースなどは結城、丁藤が行なったほか、東北学院大学学生の石本弘、渡部弘美、管野順子、高橋美左子の四氏にご協力をいただいた。
5. 本書に掲載した国土地理院発行の地形図は建設省国土地理院長の承認を受け、2万5千分の1はそのまま、5万分の1のものは7万分の1に縮少して複製使用している。(承認番号・昭53東復第11号)
6. 遺物、土層の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人・日本色彩研究所色票監修の新版標準土色帖を使用した。
7. 本報告の編集には結城があたった。
8. この調査に関する庶務、涉外などは、仙台市教育委員会社会教育課文化財係（主に朝倉秀之）が担当した。
9. 本調査は昭和52年10月に着手し、昭和53年3月31日に事業を終了した。

本文目次

I.	南小泉遺跡範囲確認調査について—調査の目的と組織—	1
II.	南小泉の概要	3
1.	自然と現状	3
2.	霞ノ目飛行場内の遺跡	11
III.	調査報告	21
1.	分布調査	21
2.	発掘調査	30
3.	5世紀の須恵器について	43
IV.	範囲確認調査を終えて	46
V.	参考・引用文献	47
VI.	図版・目録	48
1.	遺物実測図版	49
2.	遺物写真図版	58
3.	(1)図版目録	61
	(2)発掘調査出土遺物目録	71
	(3)表採遺物目録	79

写真・図表目次

写真 1	遠見塚古墳とその周辺（昭和46年）	1
表 1	仙台平野の地質層序と堆積環境	3
表 2	仙台の気象（1941～1970年までの平均）	4
第1図	南小泉と周辺の主要遺跡	7
第2図	仙台市内の弥生土器出土遺跡	8
表 3	仙台の弥生遺跡	9
表 4	日本の遺跡の年代 (^{14}C 法による)	10
写真 2	壺棺出土状況	11
写真 3	霞ノ目飛行場内遺跡全景（昭和14年）	12
第3図	飛行場の遺物出土地区	13
写真 4	竪穴住居跡床面	14
第4図	十三塚式土器拓影	15

写真 5	合口竪柄と出土状態(1).....	15
写真 6	合口竪柄と出土状態(2).....	15
写真 7	弥生式土器山土状態.....	16
写真 8	出土石器(1).....	16
写真 9	出土石器(2).....	17
写真10	土師器出土状態.....	18
第 5 図	弥生式土器（天干山式）拓影.....	18
写真11	石斧出土状態.....	19
第 6 図	弥生式土器（大泉式）拓影.....	19
第 7 図	石製櫛造品.....	20
写真12	遠見塚小学校南の畠地.....	23
第 8 図	南小泉出土の石器.....	24
第 9 図	南小泉出土の石製櫛造品.....	26
写真13	南小泉表土採集遺物.....	27
第10図	分布調査表採遺物密度図.....	29
第11図	南小泉遺跡と調査地点.....	30
写真14	発掘調査前の状況.....	31
写真15	トレンチ設定場所.....	31
写真16	トレンチ全景.....	32
写真17	溝状造構.....	32
第12図	遺構配置図.....	33・34
写真18	弥生土器山土状況.....	35
写真19	小形溝群.....	35
第13図	地形図.....	36
第14図	山上遺物 その 1	38
第15図	出土遺物 その 2	39
写真20	発掘調査出土遺物.....	40
第16図	南小泉遺跡の須恵器(1).....	43
第17図	南小泉遺跡の須恵器(2).....	44
写真21	南小泉遺跡の須恵器(3).....	45

I. 南小泉遺跡範囲確認調査について

—調査の目的と組織—

本遺跡は仙台市内における重要遺跡として学界に知られているが、その遺跡全体の範囲が不明確であり、また最近住宅化が進み、範囲確認のための調査が保護対策上必要になっていた。幸いにも今年度国庫補助を得ることができ、範囲確認調査の方法として①遺物の分布調査、②遺跡発掘調査、③所蔵遺物の実測》をあげ、これを基本として南小泉遺跡の水平的、垂直的、時間的広がりを把握する目的で調査を進めた。

調査の組織等は以下のようになっている。

(1) 分布調査

a. 調査地区

遠見塚一丁目・二丁目・三丁目、一本杉町、南小泉二丁目・四丁目、古城三丁目、若林五丁



写真1 造見塚古墳とその周辺（昭和46年）

目、南小泉・沖野の一部

b. 調査期間

昭和52年11月7日（月）～11月30日（水）

c. 調査組織

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会社会教育課文化財係

調査補助：東北学院大学考古学研究部部員

高橋幸公、金光正裕、宇部則保、斎藤好輝、中嶋康博、佐藤史仁、主浜光朗、沢川秀一、千葉多智恵、白石直子、千葉光生、工藤まり子、佐藤雅子、高橋美左子、玉川裕、石井宏幸、那須祐二、沢畠俊明、庄司博雄、井上敦子、石本敬

(2) 発掘調査

a. 調査箇所および面積

仙台市遠見塚一丁目237-1他 200m²

b. 調査期間

昭和52年10月24日～11月10日

c. 調査組織

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会社会教育課文化財係

調査補助：阿蘇幸二、阿部徳四郎、飯泉寿裕、萱場靖、熊坂吉夫、小山薫、斎藤秀寿、巣野俊夫、松本寿一、真山尚幸、渡辺由起子

調査協力：地主 加藤一

仙台市立遠見塚小学校

(3) 遺物実測

担当：仙台市教育委員会社会教育課文化財係

実測者：石本弘、渡辺弘美、管野順子、高橋美左子

協力：東北大文学部考古学研究室

東北学院大学考古学研究部

長町公民館

陸上自衛隊東北方向航空隊霞ノ目駐屯地広報部

II. 南小泉の概要

1. 自然と現状

過去の資料から南小泉地区及び南小泉遺跡の概要をつかんでみよう。

仙台市は段丘及び沖積平野からなっていて、南小泉遺跡はその沖積平野上に存在する。南小泉一帯は表1を見てわかるように、仙台平野を形成している4層のうち、霞ノ目層に当たる。

表層：沖積後期の陸上堆積層である深沼層、霞ノ目層、福田町層の砂、泥、泥炭。

浅層：沖積前期の海底堆積層である岩切層の砂。

中間層：洪積後期の蒲生層の砂れき。

深層：第3紀（鮮新世）の巣の口層、鬼岡層、三鹿層の凝灰岩類と安山岩。

以上の4層構造は仙台平野全般に共通している。霞ノ目層（層厚1～5m）は現世につづく氾濫原で、内陸部の最上部を占めている。この層は土器、石器、古代の植物種子を含む偽層砂岩、ローム層からなっていて、霞ノ目飛行場周辺に典型的に発達している。この層に対応できる地層は七北田川や阿武隈川流域に認められるが、山河床跡では砂れき層で代表されている所もあるし、海拔2mより低い地帶では、砂質ロームになっている。

表1 仙台平野の地質層序と堆積環境

地質時代：B・P	地層名	地質	層厚	化石	堆積環境
第3紀 5,000～0	深沼層	細～中粒砂	0～5		砂丘
	霞ノ目層	砂質ローム	1～5	植物遺体 土	風化土～はんらん原
	岩切層	れきまじり粗粒砂			
	福田町層	ローム～泥炭 やせ（れきまじり） ローム	0.3～10	植物遺体 土	湖沼低湿地
4世 10,000～5,000	岩切層	粗～中～粗粒砂			
	若林粘土	シルト質ローム 粘土	10～30	貝化石多発 貝化石	海底～内湾
	蒲生層	砂質ローム			
洪積世 25,000～10,000	下町段れき層	砂・れき			河岸段丘
	若林粘土	粘土	30～50		風化土～ 三角州性崩壊地
	蒲生層	砂・れき 粘土 砂・れき			
鮮新世	巣の口層	巣岩・凝灰岩 固層	100+	貝化石 植物遺体	内湾～浅海
	三鹿層	石炭・砂岩 凝灰岩・安山岩			

参考文献 (1) 鳥居洋介 1966. 仙台南面海沿岸の地質構造、仙台湾周辺地層の堆積、都市地盤調査報告書、第19号、第3章、P. 15～26. 航空写真・百葉録。

(2) ————— 1967. 食勝城跡付近、経済産業省土地分類基本点検、地図、P. 21～26、図4、5、地図、P. 1～43、図1～12、付5万分の1測量地図。

東洋書店「大仙古墳の地質・地下水」昭和48年1月

〈仙台市霞ノ目飛行場（霞ノ目層）から産出した植物遺体〉

○野外植物の部

アカマツの種果。トチノキの果実種子、果皮、種皮。オニグルミの堅果。ブナノキの殻斗。

クロヅルの翅果。ハクウンボクの種子。エゴノキの種子。クマヤナギの核。ツバキの種子。

トベラの果実、種子。コブシの種子。ショウセンマツの種子。ミヅキの核。クサギの核。

○栽培植物の部

ウメの核。マクワウリの種子。ヒョウタンの種子。シロエンドウの種子。

※奥津春生「大仙台周辺地盤・地下水」昭和48年1月から引用している。

次に気象要素によって大観すると、仙台は6月～9月の間は海洋性気候の支配をうけて暖湿であり、11月～3月の間は大陸性気候の影響によって低温乾燥になるが、その程度は東京に比し降水日数が多く、湿度もわずかに高く、また日照時間数も少いが、ただ降水量が少ないのが特徴である。特に3月は湿度、雲量、降水日数等、福岡、新潟、東京、札幌に比較して最低で、日照時間数が最多になっている。また東北地方にありながら特に雪が多いわけではなく、一年をとおしてみても、風水害の災害も少ない、めぐまれた環境といえる。

表2 仙台の気象（1941～1970年までの平均）

1. 月平均気温（℃）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
盛岡	-2.6	-2.0	1.4	8.0	13.8	17.7	21.8	23.2	18.1	11.5	5.5	0.1	9.7
山形	-1.2	-0.8	2.4	9.2	15.1	19.1	23.2	24.5	19.5	12.7	6.8	1.7	11.0
仙台	0.6	0.9	3.8	9.6	14.5	18.2	22.1	24.0	20.0	14.0	8.4	3.2	11.6
福島	0.9	1.2	4.4	10.7	16.2	19.7	23.7	25.1	20.5	14.0	8.4	3.4	12.3
東京	4.1	4.8	7.9	13.5	18.0	21.3	25.2	26.7	23.0	16.9	11.7	6.6	15.0

2. 月平均湿度（%）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
盛岡	74	71	69	67	69	77	82	82	81	79	75	75	75
山形	82	79	74	67	67	76	80	78	80	80	80	83	77
仙台	71	68	66	67	73	81	86	84	81	77	72	72	75
福島	71	69	66	64	67	76	80	80	79	78	74	74	73
東京	57	57	61	66	71	77	79	77	77	74	68	62	69

3. 月降水量 (mm)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
盛岡	66	54	82	99	89	120	173	143	179	106	87	82	1279
山形	98	75	72	68	66	107	174	127	124	106	79	116	1210
仙台	42	41	64	85	110	160	170	142	184	132	63	53	1245
福島	52	48	64	75	86	132	154	125	160	125	59	65	1143
東京	49	65	93	122	145	192	140	153	182	203	96	58	1503

4. 月間の日照時間 (h)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
盛岡	130	146	183	197	220	187	169	187	151	165	137	116	1988
山形	92	110	158	197	218	177	174	200	145	133	111	79	1793
仙台	153	157	192	204	210	152	135	164	135	148	146	133	1928
福島	148	159	193	210	215	158	157	179	133	141	140	129	1961
東京	186	167	176	178	186	137	164	194	131	135	147	171	1972

理科年表 昭和53年東京犬文台編纂

仙台は本州としては冷涼気候に属しており、びわや無花果、ざくろなどは殆んど北限に近い。茶は宮城県の北部まで栽培を見るから勿論仙台でも植栽されるが、柑橘類は全く適しない。ゆずの北限線は阿武隈川下流から柴田郡の棚木附近を通り仙台には育たない。もうそう竹は盛に生育する。

※川辺一郎「仙台市史4」昭和26年7月から引用。

仙台市街の東南部にある古城、即ち昔の若林城を中心とした一円の地域を、藩政時代は若林と汎称した。それより先き仙台城下町創設の頃、この地方は既に小泉村と呼ばれていた。小泉村は、当時南目村、荒巻村及び根岸村などと入会になっていた大村で、北は新寺小路の南側で南目村に接し、西は東七番丁の西側で荒巻村に接し、南は広瀬川をへだてて根岸村と対していった。今の南小泉地区は旧小泉村の一部であるが、この地は小泉村の遺称である。

南小泉の場合、この地方に早くから集落が開け、ここに豊富で良質な地下水が湧き出していたと伝えられている。その湧出した泉の所在地は、今のが城（宮城刑務所）の北方、そして一本杉（旧伊達家邸）の南方にあたる十文字附近、即ち南小泉字新屋敷地区内（現在の南小泉一丁目）で、またここに少林（わかばやし）神社が祀られている。この地域は古来、良質の水脈が通っている所であると言われている。しかしかつて湧き出たという泉のあった地点は現在明らかで

ない。

明治維新後、町村行政の整理統合に伴い、従来の宮城郡内の高城郷（松島地方）の小泉村と国分郷の小泉村との混称を避け、前者を北小泉、後者を南小泉と改称した。

いま南小泉と呼ばれている区域は大体昔の若林と汎称された地域で、この区域内には桃原院東、広瀬橋下、遠見塚、鍛冶屋敷、中河原塚敷、行人塚、古城東、的場、尼寺前等約30ほどの大字が区画されていた。なお最近の住居表示による区画によれば大要は次の様になっている。.

南小泉一丁目～四丁目、遠見塚一丁目～三丁目、古城一丁目～三丁目、若林一丁目～五丁目、一本杉町、中倉一丁目～三丁目。

南小泉字門田東、伊藤屋敷、遠見塚西、村東、神樋、五ツ谷、御休場南、中河原。

沖野字沢田、中樋、砂押、中堀、河原。

※菊地勝之助「宮城県地名考」昭和45年2月から引用している。

昭和14年に、この地区に駿ノ目飛行場が造られた。これをもと仙台飛行場と呼んでいた。この飛行場は戦中の昭和14～16年に飛行場拡張工事が実施され、その際、多くの遺物や堅穴住居跡などが発見され、学界から注目されるようになった。現在、この飛行場は陸上自衛隊東北方面航空隊で使用している。

当地区も住宅化が進んできて、仙台バイパスが通ると、いよいよ市街化が進み、学校建設の必要も出て、昭和42年仙台市立遠見塚小学校（校地17,493m²）が遠見塚古墳のすぐ西側に建てられた。またバイパスと遠見塚小学校間の遠見塚古墳を中心とする約17,000m²の土地が昭和48年に公有化され、現在、史跡環境整備事業が進行されている。

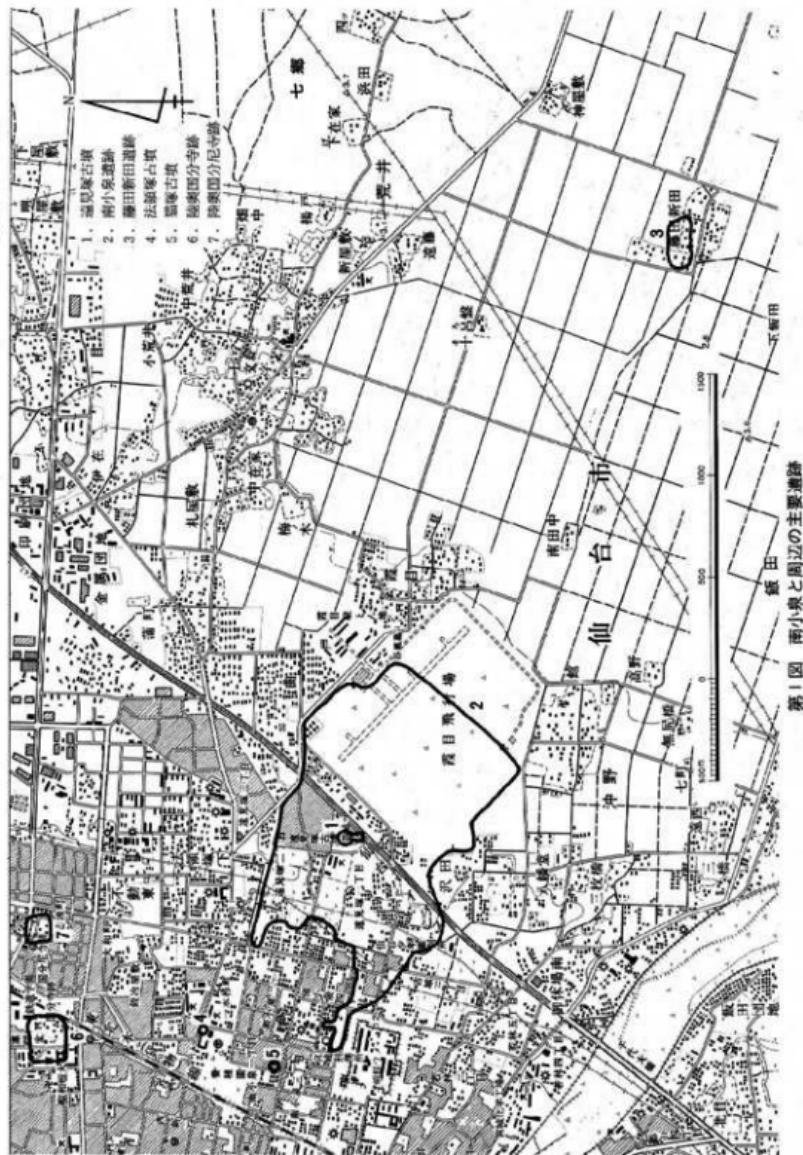
南小泉一帯は仙台平野の真中に位置し、広瀬川の北側に展開している。仙台駅から見て東南の方向になる。

この附近は昔から人が住居したらしく、多くの古代遺跡を残している。ここ南小泉遺跡は弥生時代から古墳時代、そして奈良、平安時代の遺物を出す遺跡であり、当地域の東方約3kmにある藤田新田遺跡からも弥生時代の遺物が出土する。

また南小泉遺跡の中心附近には全長約110mの遠見塚古墳（5世紀に造営された前方後円墳）もあり、これより西方にも、法領塚古墳、猫塚古墳の円墳もあり、かつては大小の古墳群を形成していたものと思われる。

律令時代に入ると条理制が敷かれるが、現在でもこの地には一部条理構造が残っており、「二の坪」、「三の坪」の地名も残っている。

また、この地域の北側に、国分寺、国分尼寺が造営されたのも、古代における生活の中心が、現在の市中心部よりは東南方向、南小泉周辺であったことを物語っている。



第一図 南小泉と周辺の主要道路

第2図 仙台市内の弥生土器出土遺跡



表3 仙台の弥生遺跡

1. 南小泉遺跡 (01021) 宮城県 (C-102) 仙台市	遠見塚1~2丁目、南小泉2丁目、古城3丁目、南小泉字伊藤屋敷、字遠見塚西、字村東、字霞ノ日	弥生式土器、石器、古式土師器、須恵器、石製模造品、紡錘車 植物種子 沖積平野 弥生(中、後)、古墳、平安時代
2. 藤田新田遺跡 (01028) 県 (C-103) 市	荒井藤田字新田	弥生式土器(樹形式)、石器出土 沖積平野 弥生時代
3. 西台細遺跡 (01005) 県 (C-105) 市	郡山二丁目	弥生式土器(樹形式)、十師器(栗斑式) 自然堤防 弥生(中)、古墳時代
4. 船渡前遺跡 (01171) 県 (C-148) 市	山田字船渡前	縄文土器(大木9)、石匙 弥生土器(大泉式)、土師器 自然堤防 縄文、弥生、奈良、平安時代
5. 岩切畠中遺跡 (01299) 県 (C-221) 市	岩切字畠中	弥生土器、土師器、須恵器、埴輪 沖積平野 弥生、古墳、平安時代
6. 六反田遺跡 (01189) 県 (C-197) 市	人野田字六反田	縄文、弥生土器、埴輪、土師器 須恵器 自然堤防 縄文、弥生、古墳、奈良、平安時代
7. 梨野A遺跡 (01154) 県 (C-180) 市	茂庭梨野東字堤開	縄文土器(大木9、10)、弥生土器 土師器、須恵器 丘陵斜面 縄文、弥生、奈良、平安時代
8. 安久遺跡 (01106) 県 (C-140) 市	中田町字安久	縄文土器、弥生土器、十師器 須恵器、中世陶器、鉄器 自然堤防 縄文、弥生、平安、中世時代

9. 諏訪遺跡 (01095) 県	長町諏訪	弥生土器 地点不明 弥生(中)時代
10. 西台遺跡 (01083) 県	鈎取字西台	弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、 台地 弥生、古墳、平安時代
11. 人来田A遺跡 (01072) 県 (C-109) 市	茂庭字人来田山	縄文土器、弥生土器 台地 縄文(中)、弥生(中)時代
12. 大苗遺跡 (01051) 県 (C-116) 市	坪沼字大苗	縄文土器、石器、弥生土器 段丘 縄文、弥生時代

宮城県教育委員会 宮城県文化財調査報告書第46集

宮城県遺跡地名表 昭和51年10月

仙台市教育委員会 「仙台の文化財分布図」収録物件一覧表

昭和51年7月

表4 日本の遺跡の年代 (¹⁴C法による)

時 代	上器、石器型式	遺 跡	材 料	逆算年数
オホーツク式	縄文	北海道常呂郡栄浦豎穴	木炭	1070±80
縄文土器	オホーツク	北海道常呂郡トビニタイ豎穴	木炭	1310±120
弥生後期	登呂	静岡市登呂	木片	1720±90 ↓ 2590±100
弥生前期	遠賀川	名古屋市西志賀貝塚	木炭	2520±140
縄繩文	後北	北海道余市郡フゴッベ洞穴下層	炭化クルミ	1950±120
縄文既期	大洞B	青森県八幡平市泥炭遺跡	クルミ	2820±130
縄文後期	安行2	埼玉県川口市石神貝塚	木炭	3000±120
	堀ノ内1	千葉県市川市堀ノ内貝塚	木炭	3780±150
縄文中期	中期縄文	北海道常呂郡常呂貝塚	貝殻	4150±100
	加曾利E1	千葉県加曾利貝塚	木炭	4790±80

縄文前期	諸磯A	千葉県加茂泥炭遺跡	木片	5100±400
縄文早期	掠型文	根室市トウサムボロ30号竪穴	木炭	3900±120
	夏島	神奈川県夏島貝塚	木炭	9240±500
	隆起線文	愛媛県上黒岩9層	木炭	12165±600
旧石器	隆起線文	長崎県福井洞穴3層	木炭	12700±500
	縄石刃	長崎県福井洞穴7層	木炭	13600±600
	ナイフ型石器	北海道湧別郡白鹿L.O.C. 31	木片	15800±400
	ナイフ型石器	長野県杉久保遺跡	木片	17700±500

- 木越邦彦、山崎文男、渡辺直経、小林国夫その他による。
- 逆算年数は1950年を基準として逆算した年数を示す。
- 東京天文台編纂「理科年表」昭和53年参考。

-出土自衛隊假ノ日駐屯地にある写真を-

複写したもの△-

2. 霞ノ目飛行場内の遺跡

遠見塚古墳附近は現在ではバイパスが通り、人家もだんだん建て混んで来たが、昭和41年バイパス開通以前はまだ田畠であった。この附近に弥生時代から古墳時代の集落跡が存在することが知られるようになったのは昭和11年頃からであって、附近的農民が「天地がえし」といって、土地を深く掘り下げて上の耕土と下の土壤を入れ替え、地味の更新をはかる作業を行なった際、弥生式土器や土師器の破片が出土することが松本源吉氏によって注意され、はじめて遺跡の存在が知られるようになったのであったが、その存在を確実なものにしたのが昭和14年春から16年春にかけて行なわれた霞ノ目飛行場（当時は仙台飛行場と呼ばれていた）の拡張工事であった。霞ノ目飛行場の建設は時局匡教事業として昭和7年12月から着手され、8年3月に完成したものであ



写真2 塊棺出土状況



写真3 露ノ目飛行場内遺跡全景（昭和14年）

ったが、日支事変がおこり、飛行場の整備が必要になって来ると従来の面積では狭少になったので昭和14年から16年にかけてその東北方および西北方に拡張工事とそれに必要な土採りが行なわれた。その際に多くの土器、石器類が発見されて、ここに弥生時代から古墳時代にかけての大きな遺跡が存在することが明らかになった（註1）。（写真3）

遺物の出土したのは拡張部の中でも西北部の拡張部であるが、その拡張部の全面から出土したものではなく、その一部に限られていた。現在の露ノ目飛行場の内部西北辺の外堀にそった、幅200mの地帯が昭和14～15年の西北部拡張区域であり、その外側、幅75m、長さ600mの地が土採場であったが、遺物の主として出土したのは飛行場の西角から150mの地点からはじまり、600mの地点に至る飛行場内の地域であった（第3図）。しかもこの地域全体から遺物が一様に出土したのではなく、古墳時代の竪穴住居跡は比較的広く散布していたが、弥生式土器はところどころに分布の中心があって、そこでは遺物の包含が密であり、他の場所では疎であり、場所によっては全然遺物を含まないところも見られた。

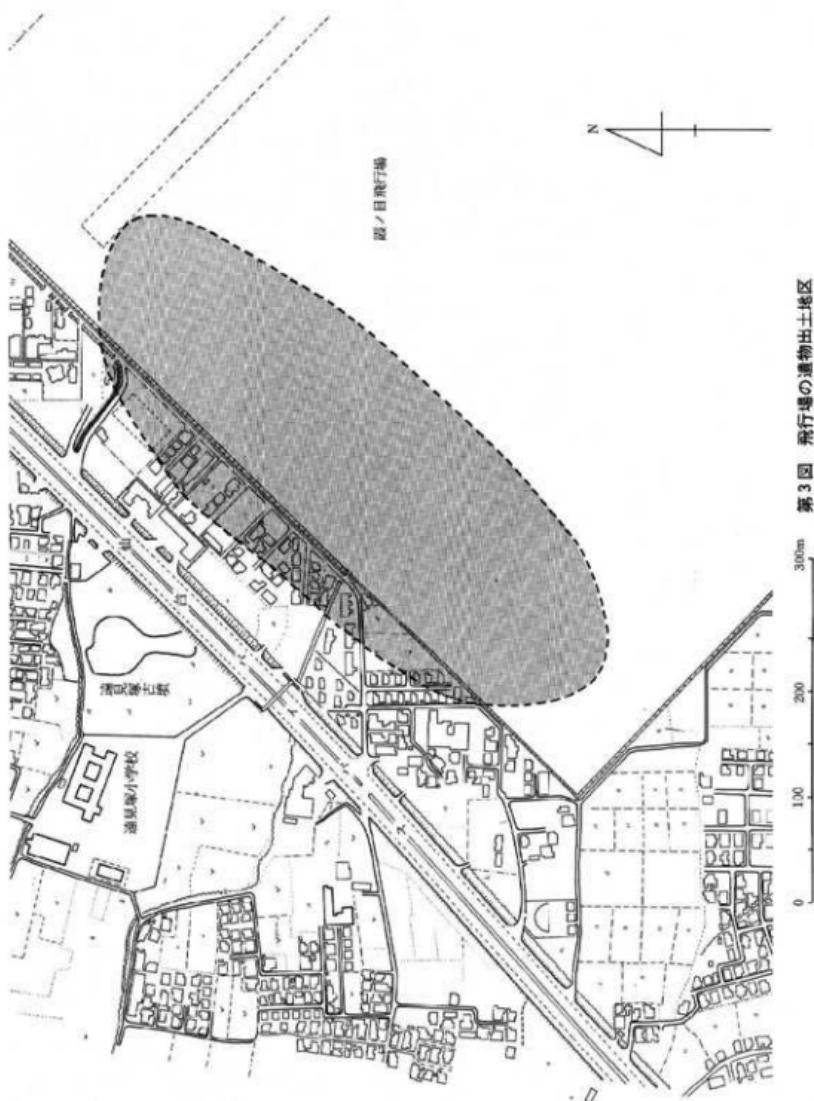
地表下30～40cmが黒褐色の耕土層で、その下に黒土層があり、その下が粘土層になっている。黒土層の厚さは所によって異なり、厚いところでは66cmに及んでいたが、粘土層の上が全部耕土層になっていて黒土層を欠くところもあった。

遺物は耕土層および黒土層中に含まれており、粘土層中には見られなかった。おそらく黒土層が元來の包含層で、耕土層のものは耕作の際に移動したものであろう。

弥生式土器は薄くは一帯に分布しているが、所々から密集して出土した（写真7）。このような場所は断面を見ると粘土面に窪味があって黒土が落んでいる。しかしその底は竪穴住居跡のように平坦ではなく、また面積も小さかった。

これに反して古墳時代の竪穴住居跡は弥生式土器の分布範囲よりも広い区域に見られた。当時は発掘調査を行なうことが出来ず、土採りの土層の断面に黒土の落込みがあらわされているのを見てその存在を知ったのであるが、その数は100を越えたであろう。断面にあらわされた竪穴の大きさは、断面の切った場所によって大小が違うが、8mが最大であった。小さなものは5mぐらいであった。粘土層に掘込まれた竪穴の深さも区々であるが、25cmから35cmが普通である

第3図 飛行場の遺物出土地区



が、まれには70cmに達するものもあった。

発掘が行なえなかつたため、竪穴の平面形については調査することが出来なかつたが、唯一つ発掘した例について言えば、過半分を失っていたが、一辺6.15mの方形の竪穴であった（写真4）。側壁の高さ27cm、床面は平坦で、中に2.5mの間隔を置いて径35cmの柱穴が2個残つていだ。元来は4個あり、

4本の柱を建てて梁をわたし、屋根を支えたものと考えられた。竪穴の底面に焼土のあるもの、炭または灰がかたまっていて炉跡と思われるものは各所に発見されたが、カマド跡と思われるものは発見出来なかつた。

霞ノ目飛行場内から



写真4 竪穴住居跡床面

当時出土した遺物は、現在、東北大学、東北学院大学、東京国立博物館、斎藤報恩会博物館などに分蔵されているが、弥生時代遺物と古墳時代遺物の2種類に大別することができる。

弥生時代遺物

弥生時代遺物としてもっと多かったのは土器である。土器の大多数を占るものは拊形印式（図版1～4）であり、完形を見られるのはこの型式に限るが、そのほかに若干の大泉式（第6図）、十三塚式（崎山匣式、第4図）、天王山式の破片が出土している。

出土弥生式土器の中に特に注目すべきは合口壺の出土で、高さ40～60cmの拊形印式の大型の壺の上に小型の壺、鉢をさかさまにしてかぶせて蓋としたもので（写真5、6）、壺の底部に焼成後に穿った孔のあるものもある。合口壺の出るのは地表下30～50cmのところにある粘土面に接する黒土層からであるが、粘土面には掘り込みの痕が見られない。

この特殊な組合せをもつ土器は耕作によって上部を削られたものが多かったが、少くとも15組ははっきり合口ということが判る状態で発見された。そのもっと多く発見されたのは飛行場の西隅から東北の方向に250m進んだ地点で、この附近から約13組の合口壺が出土した。その出土状態はピット（小竪穴）の中に密集して出るのではなく、0.5mから2mぐらいの間隔をおいて掘り込みのないところから出土した。1個だけ直立していたものがあるが、多くのものは横あるいは斜めに埋められていた（写真5、6）。壺の内部には土以外の何物をも見出すことが出



第4図 弥生式土器（十三塙式）拓影

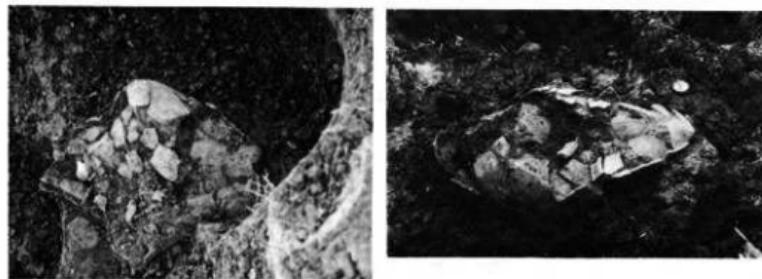


写真5 合口壺棺と出土状況(1)



写真6 合口壺棺と出土状況(2)

来なかったが、これは他地方の例から見て洗骨を容れた合口壺棺であったと思われる。附近からは他の土器片が出土せず、合口壺棺だけが出土することろを見ると、意識的に一定の地域に埋められたもので、墓地を形成していたものと思われる。



写真7 弥生式土器出土状態

石器には石斧、石ノミ、石包丁、石鎌、有角石斧、凹石、石杵などがある。石斧には太形棒状石斧、片刃石斧、有角石斧など弥生系の石斧が出ており、石鎌の中にはアメリカ式石鎌がある(写真8、9)。稲穂をつみとるのに用いたと言われている石包丁がわれわれの図目しただけでも17個を数えた。稲穂のある土器の存在とともに稲作のすでに行なわれていたことを証明するものである。



写真8 出土石器(1)

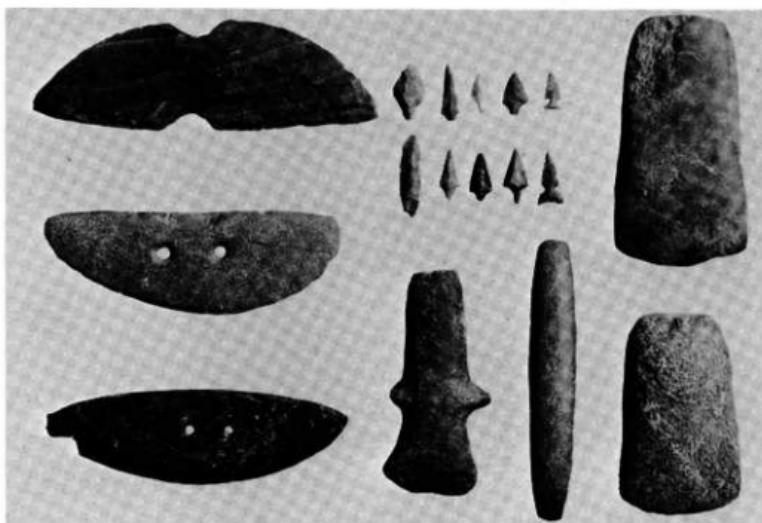


写真9 出土石器(2)

古墳時代遺物

古墳時代の遺物としては土師器、須恵器、石製模造品などがある。土師器は多く竪穴住居跡から出土し、5世紀のものと思われる兩小泉式の土師器が圧倒的に多いが、それよりも古い塙釜式より新しい栗田式も出ている(図版5~9)。成形にロクロを使用した表杉の入式の土師器は2~3点発見されたにすぎない。須恵器の出土は稀であるが5世紀の壺や碗が1~2個出土している。

滑石あるいは片岩でつくられた鏡形、剣形、手斧形の石製模造品が出土しているが、その中で注意すべきは長さ26.8cm、幅5.3cmある剣形の模造品であって、中央部に鋒を有し、基部には他の剣形模造品と同じく小孔が穿たれている。剣形模造品としては日本最大のものであろう。(第7図)。

またこれらの遺物とともにイネ、ウメ、シロエンドウ、ヒョウタン、マクワウリなどの栽培植物の種子が採集されていて(註2)、5世紀にはかなり大きな農業集落を形成していたことを示している。

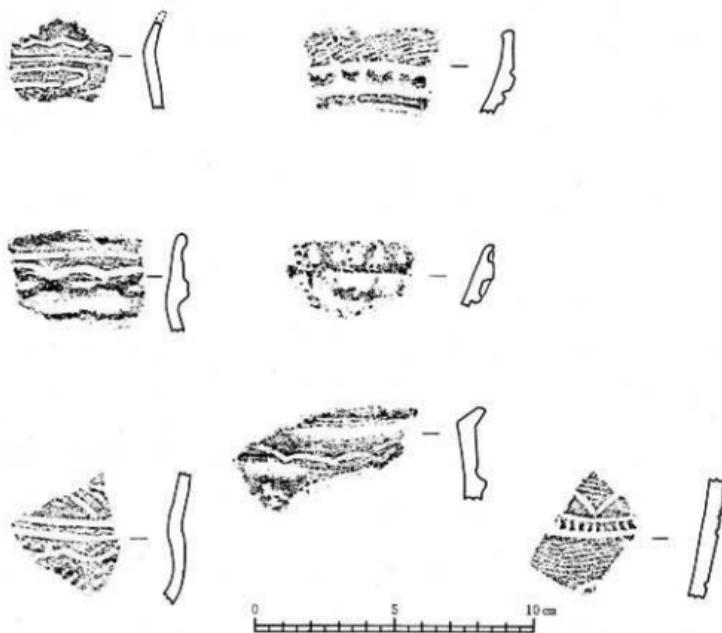
註1 伊東信雄「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史』3

2 奥津春生「仙台飛行場跡より発掘された植物遺体について」

『古代文化』14の1



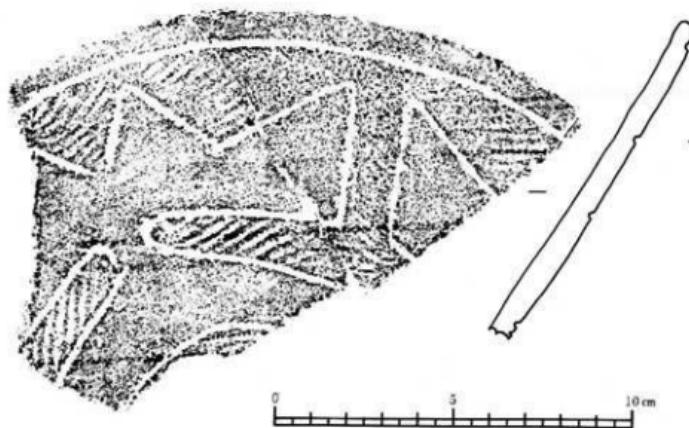
写真10 土器出土状態



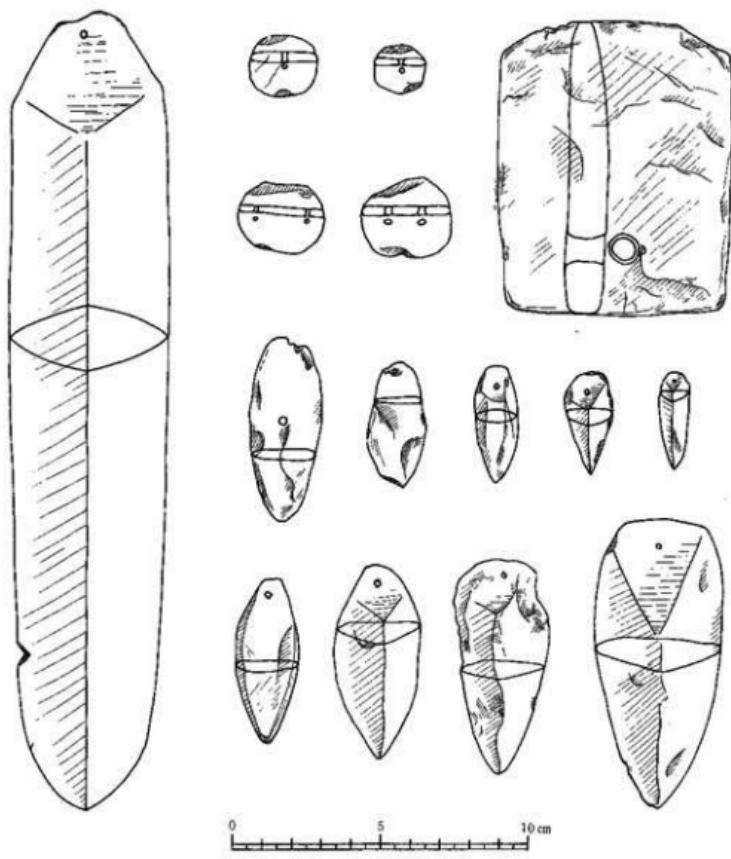
第5図 弥生式土器（天王山式）拓影



写真II 石斧出土状態



第6図 弥生式土器（大泉式）拓影



第7図 石製模造品

III. 調査報告

1. 分布調査

分布調査により次の25ヶ所の遺物散布地が発見された。すでに南小泉遺跡の範囲に入れられていた地点と重なるところも若干あるが、遺物散布範囲、そして遺跡範囲の特徴、遺物の散布状況がある程度はっきりしたと言えよう。

(1) 埋蔵文化財調査カードから

- 1) A—仙台市一木杉町3、4番
B—高橋源蔵
C—聖ウルスラ学院から古城に向う道路からみて、南小泉中学校の裏手に位置し、現在は刈になっている。南側は小さな堀が流れている。
D—東西100m×南北50m
E—土師器片2、須恵器片2
F—0.0008
- 2) A—仙台市遠見塚一丁目4番
B—伊藤英次
C—東側が道路、残り西、南、北が民家に開まれた畑である。
D—50m×40m
E—須恵器片1、土師器片11
F—0.0010
- 3) A—仙台市遠見塚一丁目7-26
B—高橋栄
C—佐藤燃料店向いの畑である。
D—60m×50m
E—土師器片3
F—0.0010
- 4) A—仙台市遠見塚一丁目13番
B—早坂実

- C—四方を道路で開まれた畠地である。
D—100m × 80m
E—須恵器片 5、土師器片 23、石製模造品（有孔円盤） 1
F—0.0036
- 5) A—仙台市遠見塚一丁目19番
B—不明
C—住宅街の一区画に位置する畠。犬地がえしも行なわれている。
D—60m × 40m
E—須恵器片 1、土師器片 3
F—0.0017
- 6) A—仙台市遠見塚一丁目22番
B—早坂六夫、尾沢長五郎
C—すぐわきに堀が走り、畠となっている。小学校南西の畠である。
D—40m × 30m
E—土師器片 6
F—0.0050
- 7) A—仙台市遠見塚一丁目10、12、13、21番
B—加藤一ほか
C—遠見塚小学校の西側に広がる畠地である。
D—100m × 100m
E—須恵器片 5、土師器片 37、寛永通宝錢 1、石器 1
F—0.0044
- 8) A—仙台市遠見塚一丁目22番
B—菅原輝男、吉田嘉一
C—現状は遠見塚小学校南側の畠。
D—150m × 100m
E—土師器片 64、須恵器片 7（梯形墳片 1 点含む）
F—0.0047
- 9) A—仙台市遠見塚二丁目20番
B—吉田勘悦
C—現状は畠。遠見塚小学校北側にそった道路を西に100m の所に位置する。
D—50m × 50m

E—土師器片か焼
土と思われる
赤褐色の粒が
見られた。

F—算出不能。

- 10) A—仙台市遠見塚
二丁目21、34番

B—早坂清

C—遠見塚小学校
北側の畑であ
る。

D—40m × 20m

E—土師器片18、
須恵器片2

F—0.0250

- 11) A—仙台市南小泉四丁目11番

B—不明。

C—住宅地に触れた畑作地。

D—15m × 25m

E—土師器片1

F—0.0027

- 12) A—仙台市南小泉二丁目11—14

B—小沢実

C—県道の両側にある小さな堀を越し、南に行った道路の西側の平壠地である。現状は畑
地となっている。

D—東西50m × 南北30m

E—土師器片6

F—0.0040

- 13) A—仙台市南小泉四丁目14番

B—加藤万太

C—現状は畑。宮城刑務所北側に位置する。

D—東西20m × 南北40m



写真12 遠見塚小学校南の畑地

E - 土師器片13

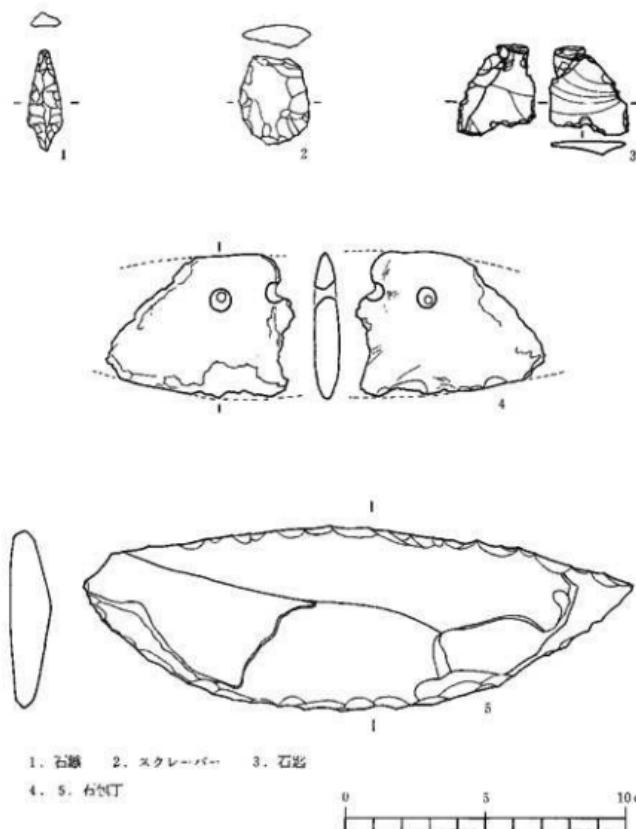
F - 0.0163

14) A - 仙台市南小泉四丁目15、16番

B - 不明。

C - 南に刑務所、東西へ広がる平坦地である。10年ほど前に天地がえしがれている。

D - 150m × 60m



第8図 南小泉出土の石器

- E—須恵器片 1、土師器片 6
F—0.0008
- 15) A—仙台市南小泉四丁目17、18番
B—伊藤英次
C—宮城刑務所東側100mに位置し、周囲は住宅と畑がならぶ所である。
D—50m × 40m
E—土師器片15、須恵器片11
F—0.0130
- 16) A—仙台市古城三丁目21、22、23番
B—宮城刑務所
C—自然堤防上の畠地で宮城刑務所作業所となっている。広範囲に土器片が散布している。
D—200m × 250m
E—土師器片31、須恵器片 8
F—0.0008
- 17) A—仙台市古城三丁目 7、9番
B—伊藤鶴三
C—畠地である。
D—50m × 30m
E—土師器片13、須恵器片 2
F—0.0100
- 18) A—仙台市古城三丁目 6、8番
B—不明。
C—畠地。耕作のためか、ほとんど遺物は表探できず。
D—50m × 30m
E—土師器片 5
F—0.0033
- 19) A—仙台市古城三丁目 7番
B—高橋栄ほか
C—畠の耕作のためか土器の散布は少ない。
D—70m × 30m
E—土師器片17、須恵器片 2

F -0.0090

20) A - 仙台市古城三丁目10番

B - 早坂昭一

C - 煙も耕作のためか遺物は少ない。

D - 20m × 10m

E - 土師器片 7、須恵器片 3

F - 0.0500

21) A - 仙台市古城三丁目13番

B - 加藤

C - 煙作地。耕作のためか表採困難。

D - 20m × 30m

E - 土師器片 6

F - 0.0100

22) A - 仙台市古城三丁目14番

B - 早坂市治郎

C - 煙地である。

D - 20m × 70m

E - 土師器片 5、須恵器片 2

F - 0.0050

23) A - 仙台市古城三丁目13番

B - 伊藤鶴二

C - 煙であるが遺物の表採は少ない。

D - 40m × 20m

E - 須恵器片 2

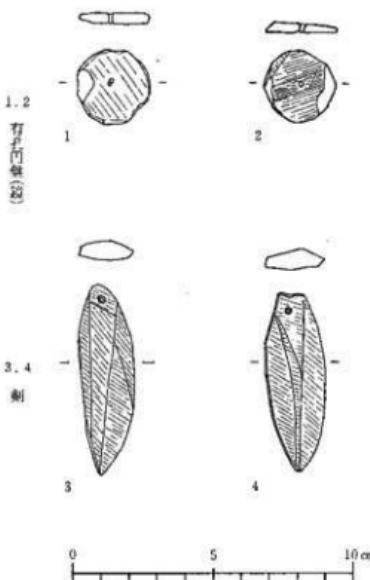
F - 0.0025

24) A - 仙台市南小泉字二ノ坪13

B - 早坂

C - 二ノ口飛行場南西境に位置し、平坦な沖積地を形成しており、畑地である。周囲は水田が多い。

D - 東西60m × 南北30m



第9図 南小泉出土の石製横造品

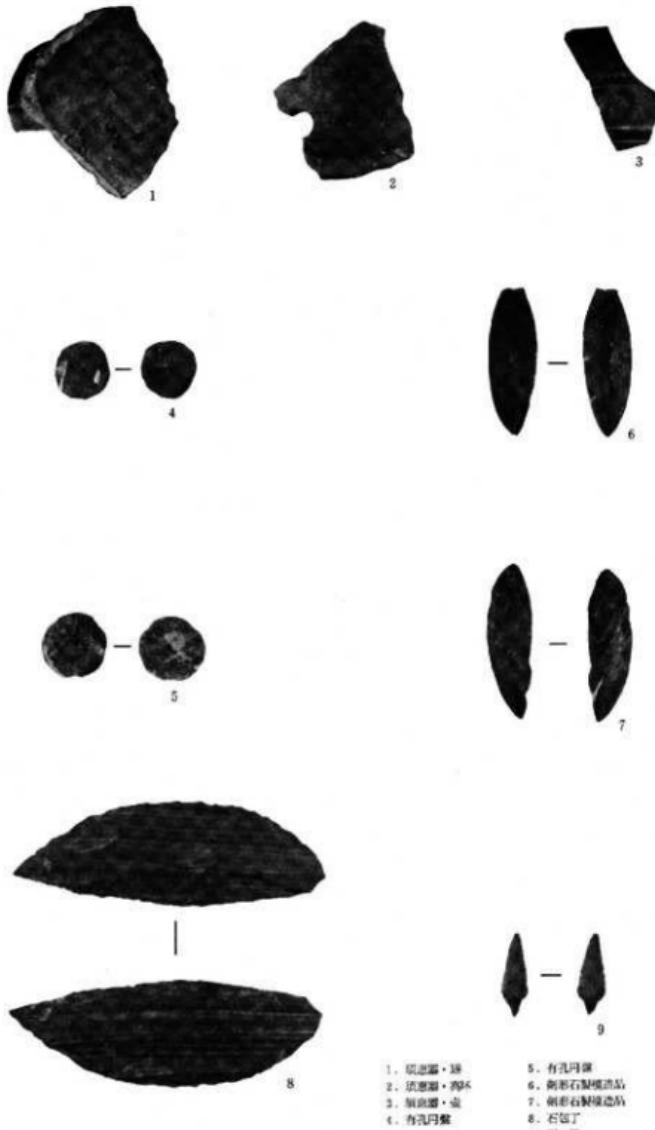


写真13 南小泉表土采集遺物

- 1. 破砕器・砾
- 2. 破砕器・砾
- 3. 破砕器・砾
- 4. 破砕器・砾
- 5. 破砕器・砾
- 6. 削形石製標造石
- 7. 削形石製標造石
- 8. 石器・砾
- 9. 石・砾

E—土師器片 2、須恵器片 1

F—0.0017

25) A—仙台市沖野字神柵37

B—今野喜太郎

C—平坦な沖積地に立地し、周辺に住宅、水田が多い畠である。

D—20m × 40m

E—土師器片 1

F—0.0013

(註) 1. Aは所在地、Bは土地所有者(敬称略)、Cは立地と現状、Dは範囲、Eは出土品と出土数、Fは出土率である。

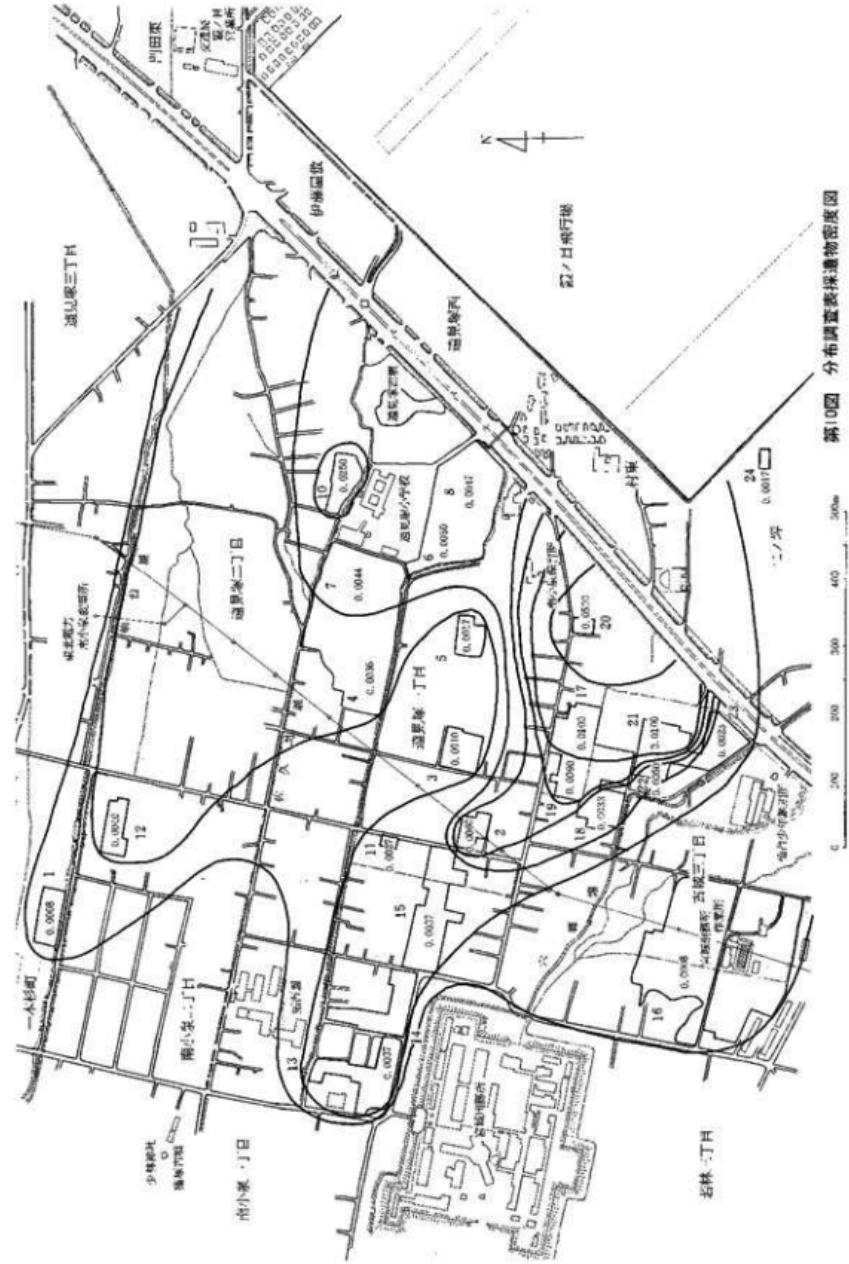
(註) 2. 出土率とは遺物の散布密度であり、遺物片数を表探範囲面積(m²)で割った数値である。

(註) 3. 13)、14)、15) の表探地点は出土率を合わせて計算して図上に落している。出土率は0.0037となる。

(2) 分布調査から見た南小泉遺跡

今回の分布調査と結果と過去の資料を合わせて遺跡の広がりというものを考へてみると、東は霞ノ目飛行場、西は一本杉町、南小泉二丁目、北は一本杉町と遠見塚二丁目を結ぶ線、南は古城三丁目ということになる。これは東西約1.8km、南北約1kmで、当初、広瀬川近くまで南方に広く分布範囲が広がるのではないかという予想に反して西に広がり、東西に長い分布範囲を示した。ただし遠見塚二丁目より北の中倉地区は相当住宅化されていること、また霞ノ目飛行場より東部は水田であることで遺物の散布を調査するのに不向きであることも考慮しておかなければならない。このことから、今回の結果より、北方、東方へ若干の拡大の可能性が残っているといえる。

遺物の表土採集数と採集地面積からみると、遠見塚古墳、遠見塚小学校周辺、特に西側と南側の畠地に多くなっているが、それ以上に遠見塚一丁目と古城三丁目の境界でバイパス寄りに位置するところが高い密度を示していることが注目される。そこを中心として西、南、北方に少なくなっているようである。東方は仙台バイパスそして霞ノ目飛行場であるが、当飛行場の昭和14~16年拡張の際、多量の弥生式土器、古式土師器が出土したが、遺物の密度から見れば遺跡の中核をなすところは遠見塚小学校、南小泉保育所周辺から霞ノ目飛行場西半にかけてで



第10図 分布調査表採掘密度図

はないかと考えられる。

次に遺物の種類を見ると、ほぼ90%までが土師器であり、残りは須恵器、若干の石製品である。今回、石製模造品（有孔円盤）と梯形瓦片は遠見塚古墳周辺で発見されたものであり、過去に表記された直口瓦片、器台脚片、石包丁、その他フレークなどもやはり遠見塚古墳周辺であった。これらの資料を検討すると、南小泉遺跡は弥生時代から平安時代までの遺物を出土するところであるが、弥生時代と古墳時代は現在の遠見塚小学校周辺から霞ノ目飛行場にかけての一帯がその居住範囲であり、平安時代にはその範囲がより西へ、より南へ広がったものといえる。

2. 発掘調査

(1) 調査地区の概要

南小泉遺跡は、仙台バイパスによって東西に二分され、東部は陸上自衛隊霞ノ目飛行場が殆どを占める。西部は畠地と住宅地となっており、西部が東部よりわずかに高い。

今回調査を行なったのは、西部のほぼ中央にあたる遠見塚小学校西側の休耕地である。

遠見塚古墳からは250m 西方である。調査地区周辺の耕地は、近年の宅地化の進展によ



第II図 南小泉遺跡と調査地点

って分割され、住宅に囲まれて点在する状況となっている。調査地区畠地の標高は、高い所で11.58m、低い所で10.30m 程で、ゆるやかな起伏が観察できる。南側には底幅1.5m 程の用水路が東流し、トレンチを設定した所の南側で流れを南方に変える。この用水路に沿って地形はわずかに低くなっている。(写真14、15)

(2) トレンチの設定と基本層序

調査は、耕地の地割に沿って東西20m、南北10mのトレンチを設定して行なった。しかし、トレンチ内のほとんどは、数次にわたる天地返しにより地表下50~80cmの深さまで擾乱されていた。このため、天地返しが比較的浅くまばらな西端部分に散在の小形溝と、掘込みの深い造構が中央部にかろうじて残っていたにすぎない。また南側壁寄りに、わずかに黒褐色の擾乱を受けない土層が薄く検出された。この層は、トレンチ南方に延びることが予想されたので、東西5m、南北4mの拡張トレンチを設けた。



写真14 発掘調査前の状況



写真15 トレンチ設定場所

拡張部において、当該地区の本来の基本層序を確認することができた。基本層序は次の通りである。

第I層—暗褐色シルト……浅い所では20cm前後で、各種の遺物が含まれる。(耕作土)

第II層—黒褐色粘土質シルト……この地区では10cm前後で、弥生式土器、土師器を多量に包含する。

第III層—暗褐色粘土質シルト……黒褐色土と褐色土を混合する。第II層と第IV層との漸移層と考えられる。上面に土師器片が散布する。



第IV層一褐色粘土質シルト……遺物は含まれない。上部から下部に移るにつれて粘土分が少なくなる。

写真16 トレンチ全景

(3) 発見遺構

発見された遺構は、溝状の遺構1ヶ所、小形溝10条である。

イ) 溝状遺構

〔掘込面〕

耕作により上部が擾乱され、プランのほとんどは第IV層中で検出されたが、南側の保存良好の部分では第II層上面で確認された。

〔方向と大きさ〕

方向は南北を向き、北側は立上る。トレンチ内では南北6mを計り、さらに南側に延びる。東西幅は5.5m前後で多少の出入がある。中央部の深さは、確認面から60cm前後である。南端の最も低い所では第II層上面より105cm程下がる。

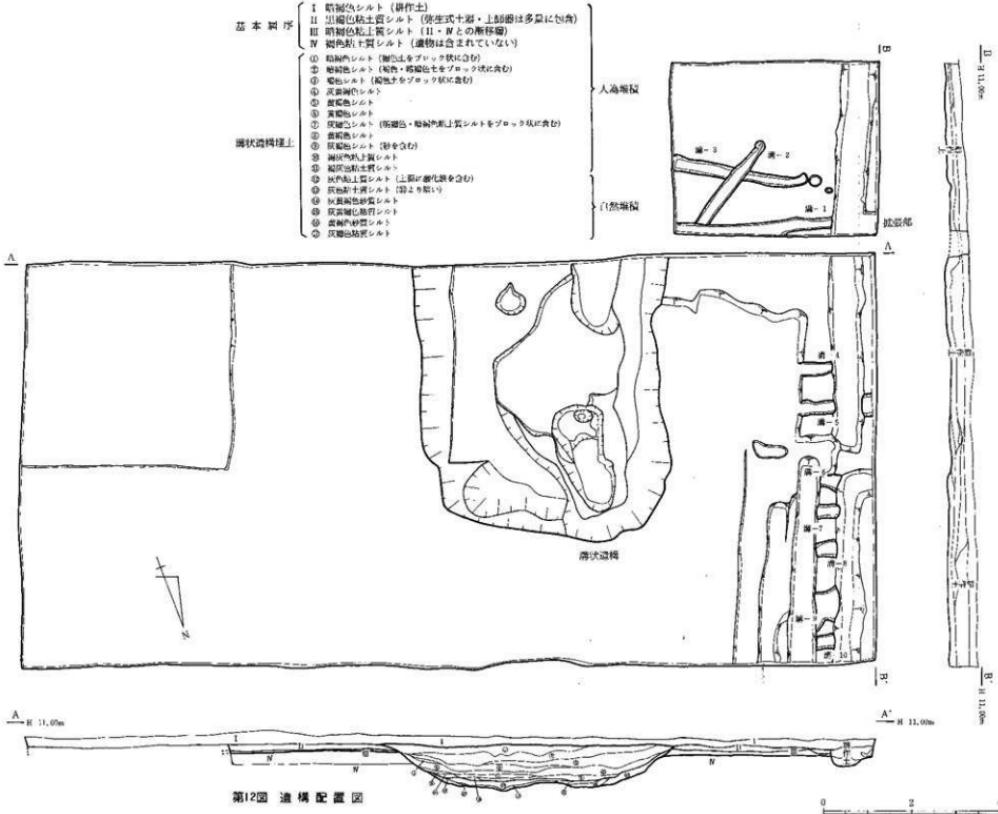
〔壁面と底面〕

壁面は、底面からゆるやかに立上り、わずかな凹凸がある。底面は北端中央と南側中央とでは20cmの差があり南側が低くなっている。

また底面にも凹凸があ



写真17 溝状遺構



り、不定形な溝状に一段下っているが、全体としてゆるやかな弧状を呈す。

[埋土]

埋土17層に細分される。上層の①～⑪層までは人為に埋られた層と観察される。⑫層～⑯層までは自然的な堆積と観察された。⑯層上面には鉄分が酸化して薄層をなしており、この層を基底として水が溜っていた時期のあったことも考えられる。底面の溝状の部分には、炭化物を含む暗褐色土が薄く部分的に分布する。底面は粘土を含む荒いシルト層（第Ⅳ層）である。

[出土遺物]

①～⑪層からは、平瓦、丸瓦、土師器、須恵器、鉄製品の各破片が出土した。⑫～⑯層中からは、土師器片と弥生式土器片が出土している。この弥生式土器片は一括して遺構中央よりやや西に寄った底面から出土した。

(写真18)



写真18 弥生土器出土状況

口） 小形溝群

小形溝群は、トレント西側と、拡張部で発見された。トレント西側で検出された小形溝は、天地返しを受けていない部分に、長さ40cmから80cm程度残存するだけである。拡張部での小形溝の確認面は第III層上面である。

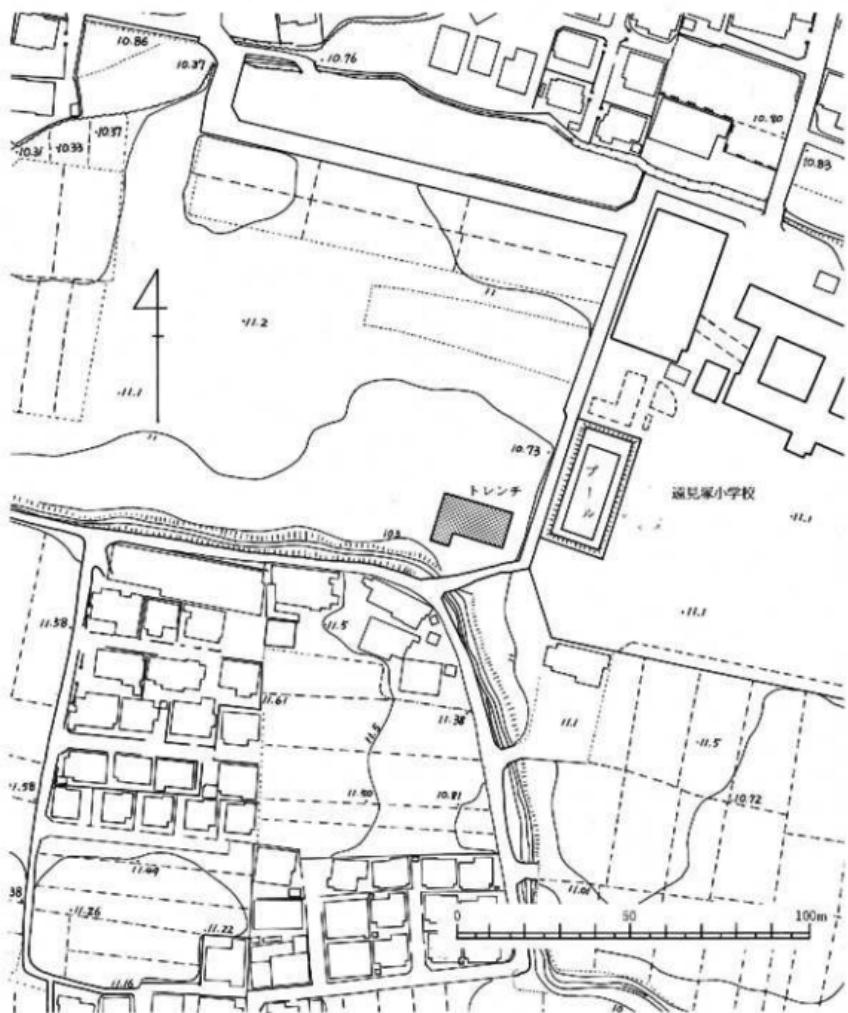
溝は10条発見されたが、溝-2以外は東西方向に延びる。溝の幅は上面で30cm前後であるが、溝-9だけは60cmと幅広である。断面形はいずれもU字状を呈する。

拡張部の3条は、新しいものから1、2、3と重複しているが、他の7条（溝-4～10）は、



写真19 小形溝群

40cm～70cmの間隔で並んでいる。溝-1～9の埋土は、黒褐色粘土質シルトが一層堆積しているが、底面に近くなると褐色土の小ブロックをわずかに混入する。溝-10の埋土は他の小形溝に比してやや明るい。小形溝の埋土は、概して第II層の土性と類似する。小形溝からは、弥生式土器片と土師器片が出土したが、



第13図 地形図

量は多くない。(発掘調査出土:遺物目録参照)

土師器はロクロを使用したものはない。

(4) 出 土 遺 物

出土遺物には、弥生式土器、土師器、須恵器、瓦、石製品、鉄製品がある。土器の類は破片だけで、原形を留めるものではなく、また図上にて復元できるものもない。

イ) 弥生式土器

弥生式土器は、発掘調査出土遺物目録No.49(図14-1、写真20-1)が溝状造構底面より出土したほか、No.16(図14-5)、No.27(図14-6、写真20-5)、No.53、No.83の小片が出土したに過ぎない。

No.49は、肩部に最大径をもつ壺で、口縁部は欠損し、体部3分の1と底部が残る。体部の上位から中位には細かなL.Rの縄文が、横方向へ下から上に向って2.5cm四方くらいの単位で施される。下位はヘラケズリによって調整されている。底面には、細かな布の圧痕が観察される。例形式であろう。

No.27は溝-2より出土した。壺の肩部片と考えられる。外面には、右下がりの斜方向に4条の平行する細くて浅い沈線文が施されている。

ロ) 土師器

土師器は遺物中で、最も多く出土したが、いずれも破片であって、全体を知ることのできるものは出土しなかった。破片で図化できたのは、No.17、No.22、No.35の3点である。

No.17(図14-4、写真20-4)は、壺の口縁部片で、口径20cm程である。器面は風化しているが、内外面にヨコナデの痕跡を留める。

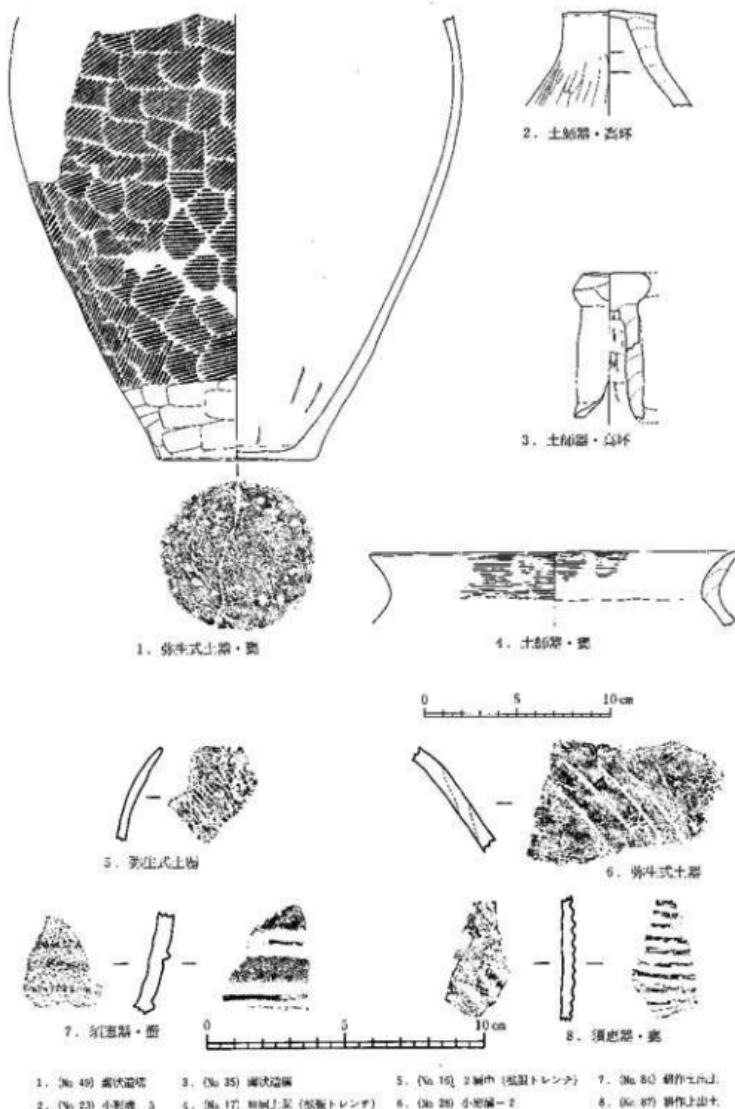
No.23(図14-2、写真20-3)は、高壺の脚部片である。外面の継ぎ目のヘラミガキ調整がなされている。

No.35(図14-3、写真20-2)は、高壺の脚部である。壺の底となる上端部はかなり磨滅している。全体が赤く焼けているので2次的な使用がなされた可能性がある。

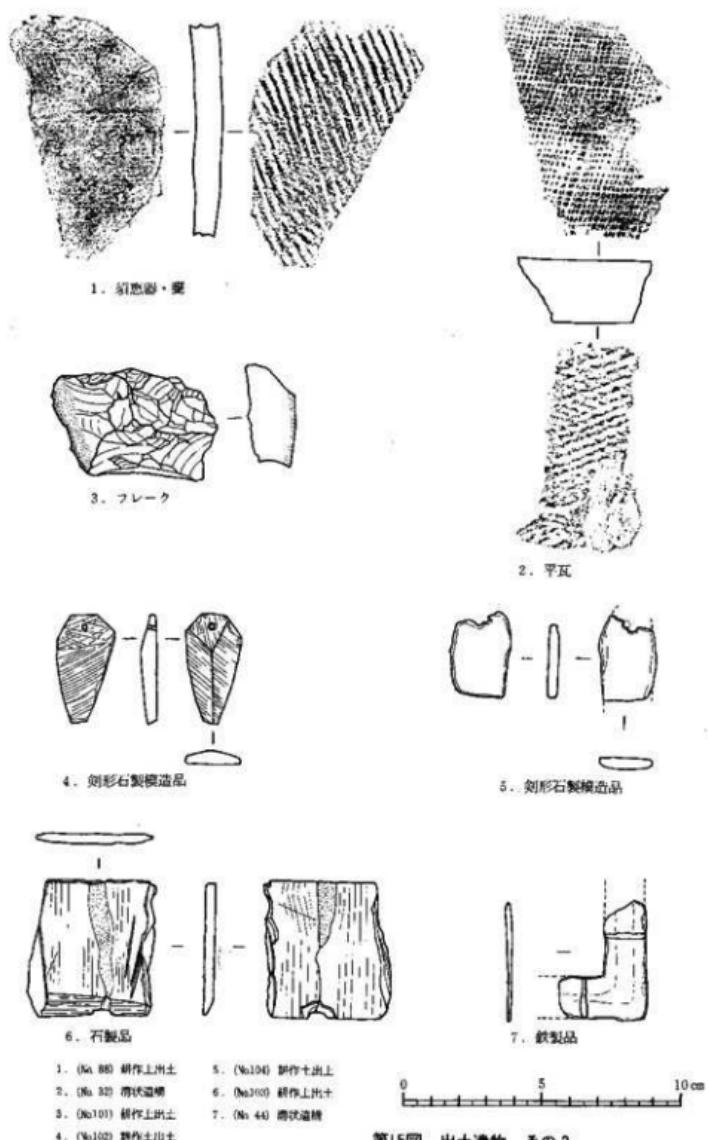
このほかの土師器片には、内黒の壺の破片も数点見られる。ロクロを使用したと考えられるのは1点だけである。細片の中に、ロクロを使用したものがあったとしても、やはり全体としては、極めて少量であると推察される。

ハ) 須恵器

須恵器は、小片が8点出土しただけである。No.84(図14-7、写真20-9)は直口壺の頸部



第14図 出土遺物 その1



第15図 出土遺物 その2



写真20 発掘調査出土遺物

1. 有生式土器 (No.49) 6. 半丸 (No.32) 11. 亂痕器 (No.88)
 2. 土師器 (No.33) 7. 丸瓦 (No.33) 12. フレーク (No.100)
 3. 土師器 (No.23) 8. 丸瓦 (No.34) 13. 石製器 (No.100)
 4. 土師器 (No.17) 9. 須恵器 (No.84) 14. 斧形石製焼造品 (No.100)
 5. 有生式土器 (No.58) 10. 亂痕器 (No.87) 15. 斧形石製燒造品 (No.100)
 16. 鉄器 (No.44)

片で、2木の陸帶の間に細かな波状沈線文が施されている。

二) 陶磁器

陶磁器は、耕作土中から24点の破片が出土した。いずれも近世以降のものである。

ホ) 瓦

瓦は6点出土した。溝状造構から出土したNo.32、No.33、No.34は古代のもので、耕作土から出土したNo.50、No.51、No.91の3点は近世以降のものである。

平瓦No.32(図15-2、写真20-6)は、凹面に布目、凸面に網目がある。No.33、No.34は丸瓦の玉縁部で、No.33(写真20-7)の凹面はケズリ、No.34(写真20-8)の凹面は布目压痕である。

ヘ) 石製品

a. フレーク

No.101(図15-3、写真20-12)は、原石の表面部分をわずかに残すフレークである。色調は茶褐色を呈し、中に小さな石英を多数含んでいる。流紋岩製。

b. 剣形石製模造品

No.102(図15-4、写真20-14)は、剣先部をわずかに欠損する。残存長3.9cm、最大幅2.0cm、厚さ0.4cmを計る。全体は五角形を呈し、片面は平らで、片面は錐状の稜をもつ。紐穴は両面から穿孔され、鏑(しのぎ)をもつ面からは垂直に、反対の平らな面からは斜めに穿孔されており、接点はわずかにずれている。平らな面から斜めに穿孔されているのは、反対の稜を造り出した後、片側に製品を傾けて穿孔したことによるものであろう。滑石製。

No.104(図15-5、写真20-15)は、両端部を欠損する。残存長3.1cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmを測る。磨減が著しい。鏑が造られたかは不明である。中軸線より片寄って穿孔されている。No.102と同様滑石製であるが、銀白色の結晶質のものが縞状に入っている。紐ずれが認められる。

c. その他

No.103(図15-6、写真20-13)は、粘板岩製の偏平な石で、残存長4.4cm、幅4.8cm、厚さ0.5cmを測る。表面に擦痕が観察される。片側には一面から刀状に削った痕跡があるが、十分に鋭くはない。

ト) 鉄製品

鉄製品は全て小破片で、12点出土した。

No.44(図15-7、写真20-16)は、溝状造構から出土した。幅1.4cm、厚さ0.25cm程の薄い板状のもので、直角に山っている。両端が折れており、形状は不明である。

(5) まとめ

本調査においては、耕作による攪乱が著しく、調査地点の保存状態が良くなかったために、当初の目的を十分に達成することができなかった。しかしながら、一部で基本的な層序を確認でき、また2種の遺構を調査することができたことは、南小泉遺跡の包括する歴史的、文化的価値を知る手掛りを増したと言える。

調査成果としては、今後への課題を含めて、次の各点がある。

①南小泉遺跡の基本層序については、「仙台市史3」に伊東信雄氏が、仙台飛行場の西部について「地表下30~40cmが黒褐色の耕土層で、その次に黒土層があり、黒土層の下が地盤である粘土層になっている。黒土層の厚さは所によって異なり、粘土上の土が全部耕土となって黒土層を欠くところもあり、厚い所では60cmに及ぶ所もある。

遺物は耕土層中に含まれ、その中黒土層に多く粘土層中には何も見られない。おそらく黒土層中のものがオリジナルなものであって、上の耕土層にあるものは耕作の際にこれが攪乱されて動いたものであろう。』と報告されている。

黒土層、粘土層はそれぞれ本調査の第II層と第IV層にあたる。これにより遺物包含層である黒褐色土層（黒土層）は、南小泉遺跡の東部から西部にわたって広く分布することが明確になった。

②溝状遺構は、底面から弥生式土器が出土し、上部人為堆積層からは平安時代と考えられる瓦が出土している。両遺物の時間的差は著しい。しかし、溝状遺構の掘込み面が第II層上面であることを考えれば、この遺構は、平安時代かあるいはこれに近い時期のなんらかの土木事業の跡と考えられる。弥生式土器は後後に落ち込んだものであろう。

③小形溝群と同様の遺構は、南小泉遺跡のほかに、同年仙台市内で調査された安久東遺跡及び六反田遺跡においても発見されている。両遺跡とも、褐色土層の上に堆積した黒褐色土層中から、あるいはこの黒褐色土を排除した褐色土層上面で確認されている。3遺跡とも、幅30cm前後で、褐色土層を15cm位掘込んで、規則的に並んでいる。時期は、南小泉の場合には、弥生時代以降、平安時代以前という大きな枠の中でしか、現時点では考えられない。安久東遺跡では、平安時代の住居に切られていた。六反田遺跡では、奈良時代から平安時代中期と考えられている。

遺構の性格については、的確な指摘はできないが、いずれの遺跡も沖積地に立地し、現在は耕地となっている。それに加えて遺構の形状が、現在行なわれている天地返しの跡に似ていることは興味深い。この点、今後さらに検討が必要であろう。

3. 5世紀の須恵器について

これまで古式土師器や石製模造品が古墳時代の遺物として知られていた。遠見塚古墳が上取りで破壊されたときに粘土棒から出土したといわれるものも1個の土師器の蓋であり、須恵器について報告、記載されているものはなかったと思う。

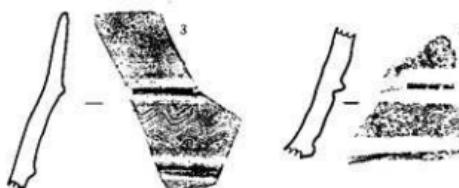
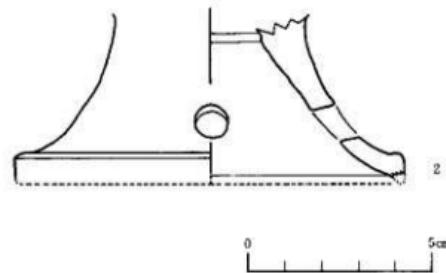
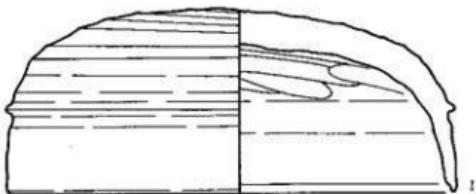
ここ近年になって、仙台市の北部、台ノ原・小川原丘陵の一角（仙台市原町小田原案内）で5世紀の須恵器窯（社1）が発見されてから注目されるようになってきて、今回実施した発掘調査及び分布調査においても若干ではあるが貴重な須恵器の発見があるので、ここに6例を引き、若干の所見を述べたい。

（第1例）蓋

東北大学所蔵のものである。この蓋は成ノ日飛行場拡張工事の際に出土したものであり、蓋杯の蓋に当たるものと思われる。直径12.2cm、高さ5.0cmを測る。肩部に浅い一条の沈線と隆起がめぐり、全体がロクロ調整を受けている。天井部は回転ヘラ削りで、内面大尖部はヘラナデされている。色調は内外とも灰色で、胎土に2~3mmの砂粒を若干含む。焼成は良好で堅緻である。第16図1。

（第2例）高杯脚片

山東跡研究会所蔵である。約4分の1の脚



第16図 南小泉遺跡の須恵器(1)

の破片であるが、2つの円窓が若干残っているので、4つの円窓をもつものと思われる。内外面ともロクロ調整を受けている。脚基底部は断面三角形を呈している。色調は内外面とも暗灰色で、胎土は良好、緻密である。第16図2。

〈第3例〉 直口壺片①

古窯跡研究会所蔵のもので、 $5 \times 2.5\text{cm}$ 位の口縁部破片である。2重の隆線がめぐり、その隆線間に細かい波状沈線が施文されている。内外面とも黒っぽい灰色で、断面は赤褐色を呈する非常に焼きの状態がよく、胎土も良好で緻密である。全体がロクロ調整されている。第16図3。

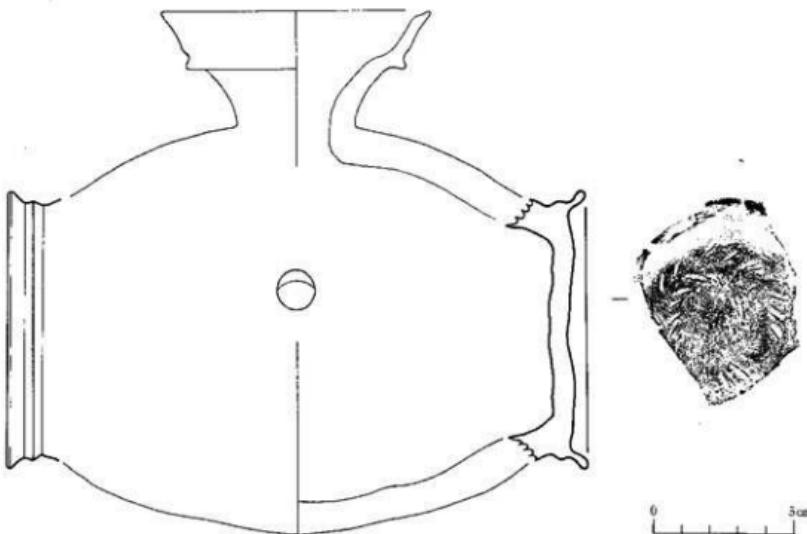
〈第4例〉 直口壺片②

今回の発掘で出土した直口壺片。口唇部がないので直口壺片と決定するには若干の危険があるが、第3例とはほぼ同様の形を示すので直口壺片としておく。

第3例同様、2本の隆線とそれに挟まれた波状沈線が施文されている。隆線の湾曲状況から第3例のものより口縁部は外反するようである。色調は内面が明灰色、外面が灰色。胎土は砂粒が混入して焼きもあまく、なんとなくもろい感じがする。破片は約 3.5cm 一辺の三角形を呈するものである。外面を見るとロクロ調整されていることが僅かにわかる。第16図4。

〈第5例〉 椎形壺片

分佈調査で表探したもので、椎形壺端部の円盤部破片である。円盤部外面には列点渦巻状の



第17図 南小泉遺跡の須恵器(2)

圧痕があり、内面はヘラで左まわりにナデつけてある。円盤部周囲は胴部との接点で断面三角形の隆帯が、その外には唇状に薄く引き出されたものが、高台付の杯の台のように形作られている。色調は胴部外面は黒釉がかかっているように見え、内面及び円盤部外面は灰色を呈している。焼成、胎土とも非常に良好である。第17図。

〈第6例〉 越

これは第1例同様飛行場拡張工事の際に出土遺物であるが、実物の存在は不明である。これは陸上自衛隊霞ノ目駐屯地内にある防衛館に展示されてあった写真の複写であり、その説明書きによると所有者は大友義一氏となっているが住所等はわからない。

実物がないので細い観察等はできないが、形態から見ると大蓮寺窯跡出土の庭に類似している。胴部中央で最大径になり、そこを中心に施文されている。まず穴を開けただけの注口、列点状圧痕帯及びそれを挟む2条の沈線が特徴的である。写真21。

これら6つの遺物は古い形態の須恵器であり、5世紀後半から6世紀初頭にかけてのものと考えられる。もちろん発掘や表探で平安時代と思われる須恵器も発見されているのであるが、これら古手の須恵器は南小泉遺跡の古墳時代の上限を語る重要な資料となると思われる。

第5例の樽形廻片は仙台市西部の金山窯跡からも発見されており、また最近になって、当市で発掘調査した裏町古墳（註2）の遺物を再検討した結果、樽形廻片もあることが指摘されている。（註3）

第2例にあげた直口廻片は他の物と比較して非常に出来が良く、地元製造が確実な大蓮寺窯跡、金山窯跡出土の遺物に比べても、地方色を感じさせない遺物といえる。



写真21 南小泉遺跡の須恵器(3)

（註1）古窯跡研究会「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告」（陸奥国官窯跡群II）昭和51年5月
参照。

（註2）仙台市教育委員会「裏町古墳発掘調査報告書」昭和49年3月参照。

（註3）古窯跡研究会の渡辺泰伸氏の御教授による。

IV. 範囲確認調査を終えて

今回の調査報告が少しでも学術的な資料となり、また行政的な見地からもいろいろ今後の保護対策について示唆してくれたものと思う。

①水平的広がりとしては分布調査でもふれているが、遠見塚古墳を位置的な中心として、東西に長い広がりをみせている。密度については、遠見塚古墳南域から、霞ノ目飛行場西南地域が密度高く、北方及び西方に薄くなっている。この点から判断すると、南小泉遺跡内では、特に東南地域に各時代の生活の場が重複しているようである。

②垂直的な見方としては「分層調査して畑地から出土器等が表土に採集されるということは、包含層が現地表からさほど深くないことを意味しているとも考えられるし、またかつて天地がえしたところもあることから、1m前後の深さにある遺物包含層であっても、現在の畑の土に遺物が破片となって混入しているものもあることが、容易に考えられる。しかし今回発掘調査した地点では、天地がえしのされていなかった部分の、地表下約20cmで山式土師器の包含層に達していることからして、この地域に限定することとなるが、現地表近くに包含層が残存しているか、もししくは存在していたものといえる。

③時間的な面から見ると、出土、表探遺物の分類から、弥生時代から平安時代にかけての遺跡ということが出来る。

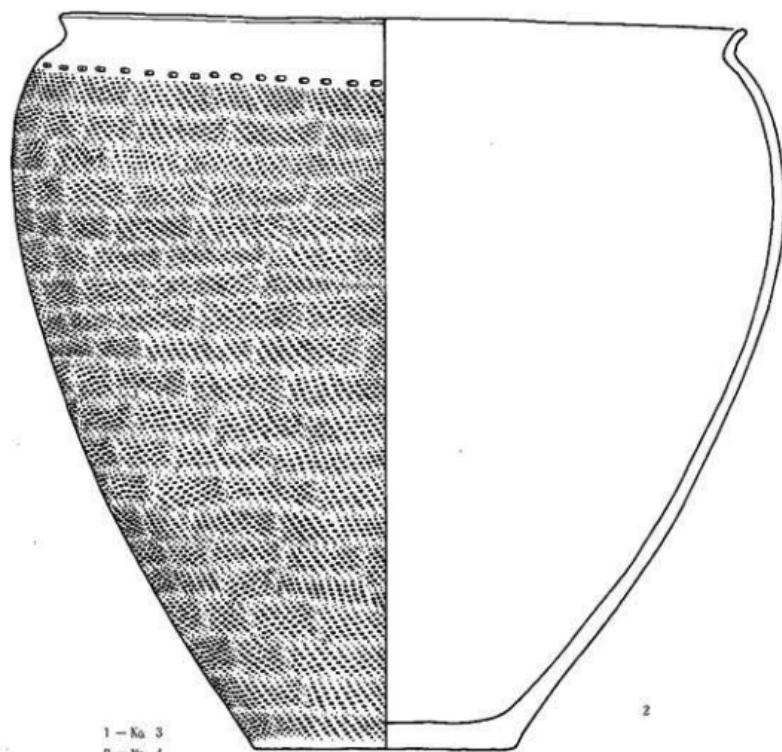
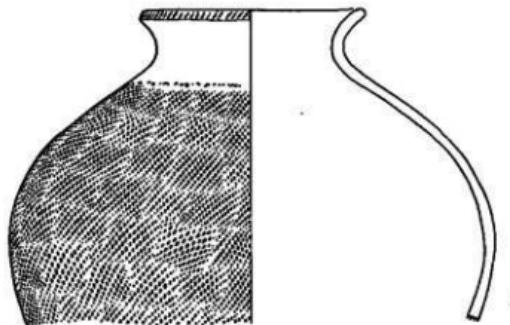
以上全体的なことを簡単にまとめてみた。

V. 参考・引用文献

- 奥津春生「仙台飛行場遺跡より発掘された植物遺體について」古代文化第14巻第1号
- 日本考古学協会「弥生式土器集成」I, II
- 志間泰治「鰐沼遺跡」東北電力株式会社宮城支店
- 伊東信雄「仙台市内の古代遺跡」仙台市史3
- 伊東信雄「古代史」宮城県史1
- 仙台市教育委員会「裏町古墳発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第7集
- 仙台市教育委員会「史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報」仙台市文化財調査報告書第11集
- 仙台市教育委員会「史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報」仙台市文化財調査報告書第12集
- 中村五郎「東北地方南部の弥生式土器編年」東北考古学の諸問題
- 古窯跡研究会「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告」陸奥国古窯跡群II
- 田辺昭二「陶邑古窯址群I」平安学園考古学クラブ
- 東京天文台編纂「理科年表」昭和53年
- 伊東信雄「稻作の北進」古代の日本8東北
- 伊藤玄三「五世紀の古墳」古代の日本8東北
- 伊藤玄三「弥生文化」東北の歴史(上巻)
- 高橋富雄「仙台平野の夜明け」宮城県の歴史
- 仙台市教育委員会「仙台の文化財」(上編)
- 仙台市史統編纂委員会「古代の仙台地方」仙台の歴史
- 仙台市史図録編纂委員会「目で見る仙台の歴史」
- 奥津春生「大仙丘陵の地盤、地下水」

VI. 図 版・目 錄

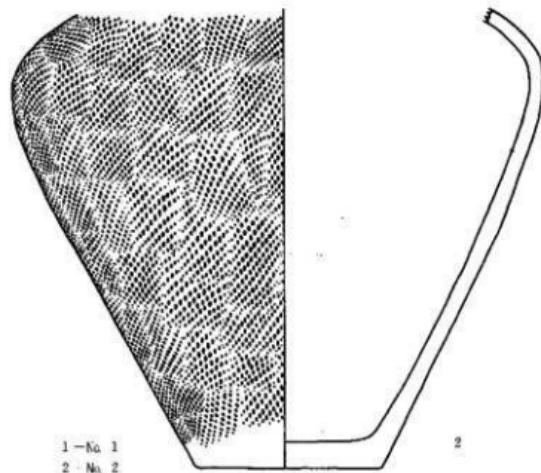
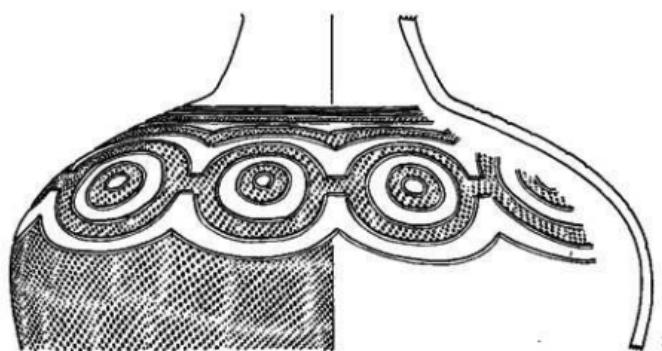
図版1～12に掲載した遺物は今回の発掘調査で出土したものでなく、霞ノ日飛行場出土のものを主として過去に出土していたものであり、この機会に東北大學、東北学院大學の協力を得て実測、写真撮影したものである。



1 - No. 3
2 - No. 4

図版 1

0 2 4 6 8 10 cm

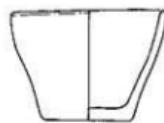


図版 2

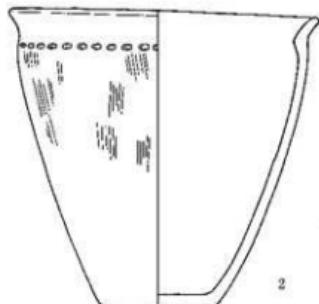




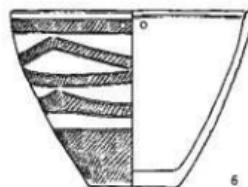
1



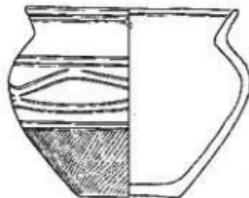
5



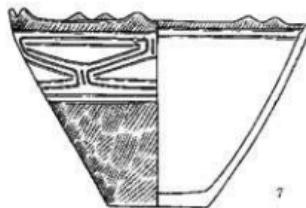
2



6



3



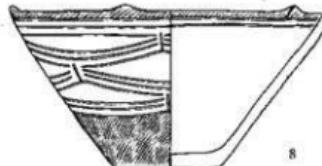
7



4

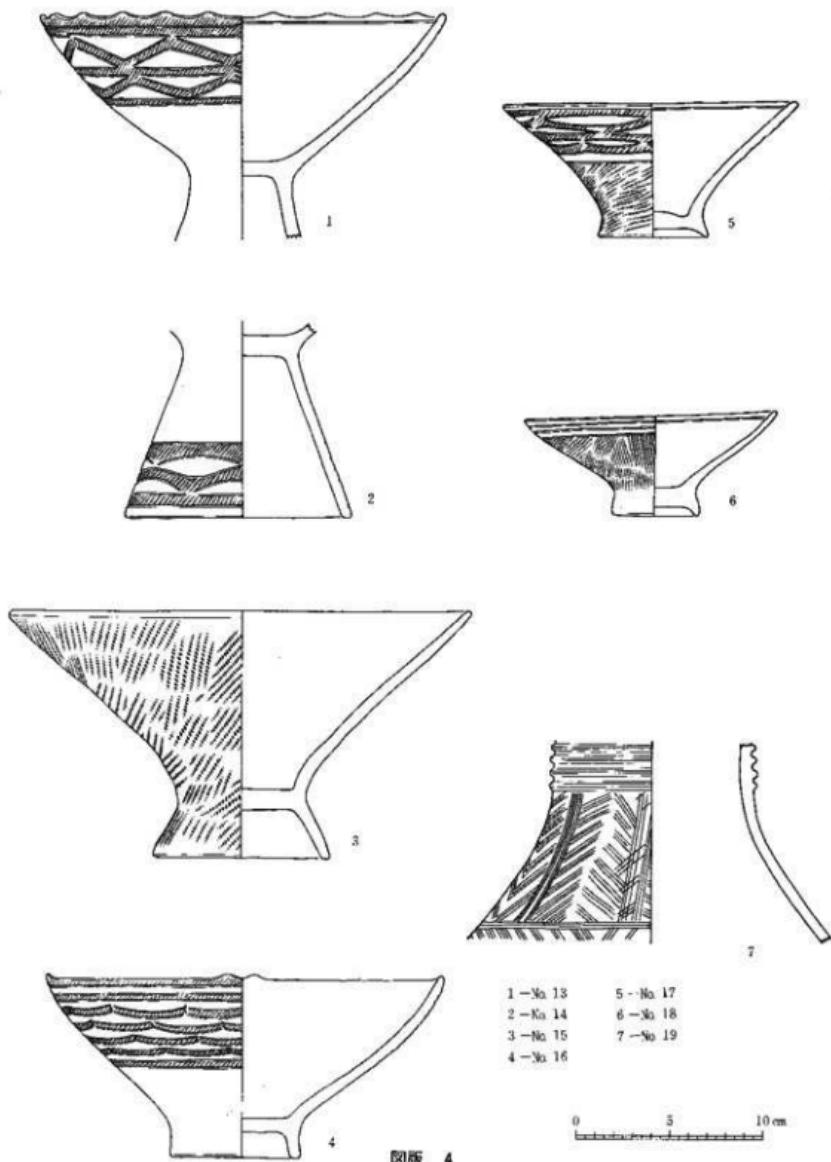
- 1 - No. 5
- 2 - No. 6
- 3 - No. 7
- 4 - No. 8
- 5 - No. 9
- 6 - No. 10
- 7 - No. 11
- 8 - No. 12

図版 3

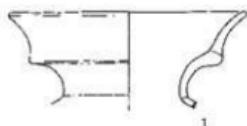


8

0 5 10 cm



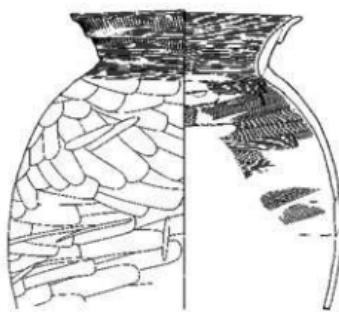
図版 4



1



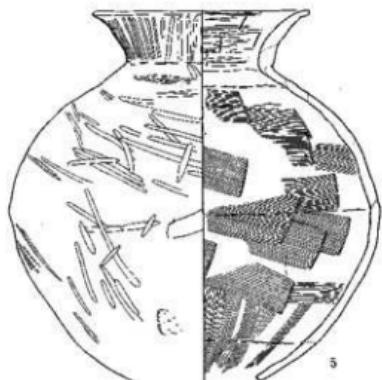
2



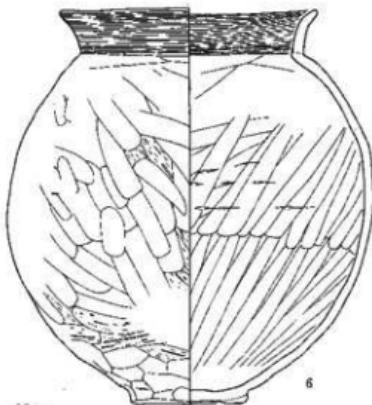
3



4



5



6

1 - No. 20

4 - No. 23

0 5 10 cm

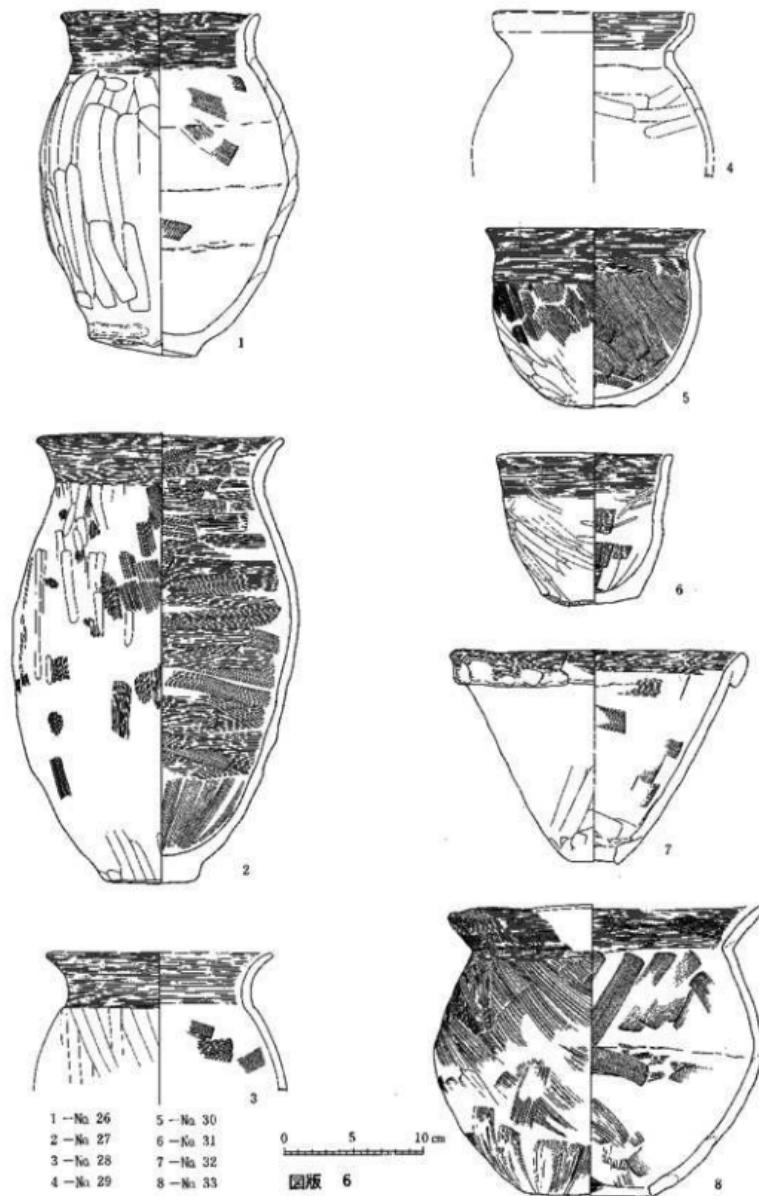
2 - No. 21

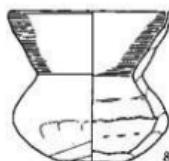
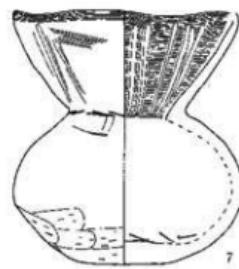
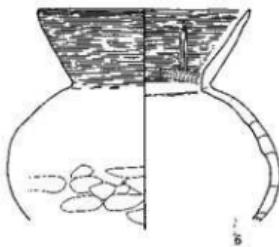
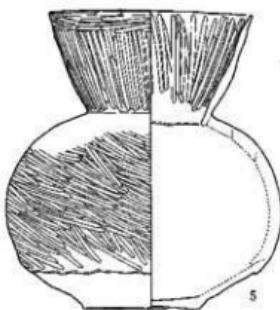
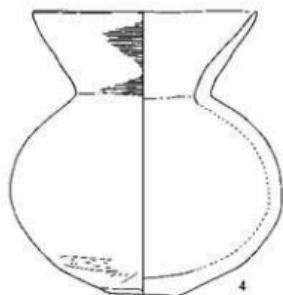
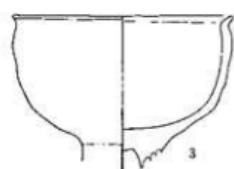
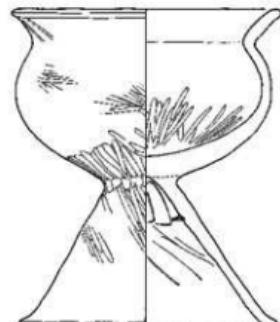
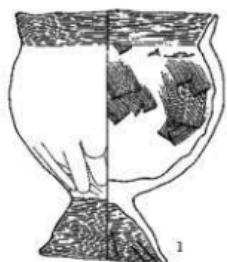
5 - No. 24

3 - No. 22

6 - No. 25

図版 5

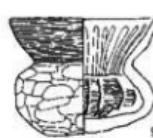


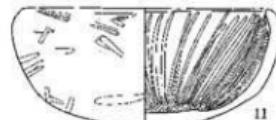
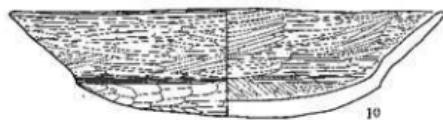
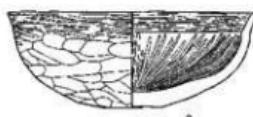
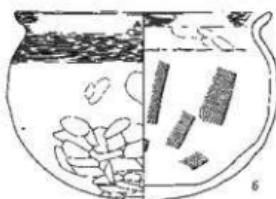
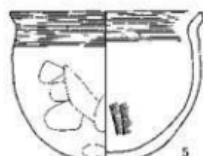
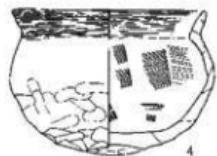
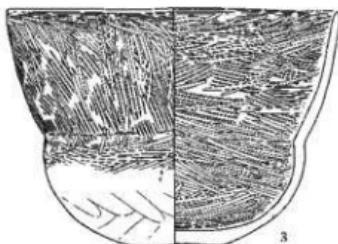
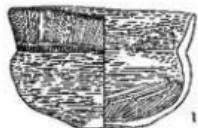


- | | |
|------------|------------|
| 1 - No. 34 | 6 - No. 39 |
| 2 - No. 35 | 7 - No. 40 |
| 3 - No. 36 | 8 - No. 41 |
| 4 - No. 37 | 9 - No. 42 |
| 5 - No. 38 | |

0 5 10 cm

図版 7





1 - No. 43

5 - No. 47

9 - No. 51

2 - No. 44

6 - No. 48

10 - No. 52

0

3

10 cm

3 - No. 45

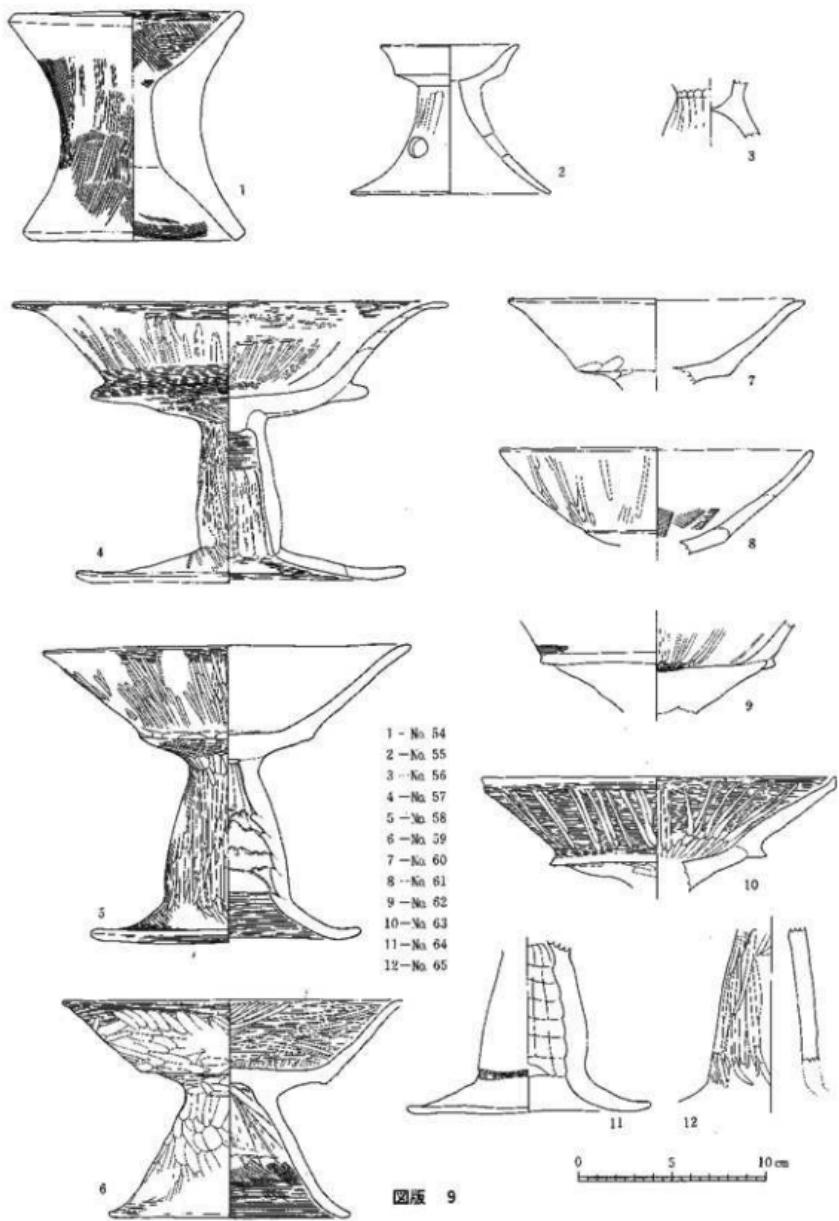
7 - No. 49

11 - No. 53

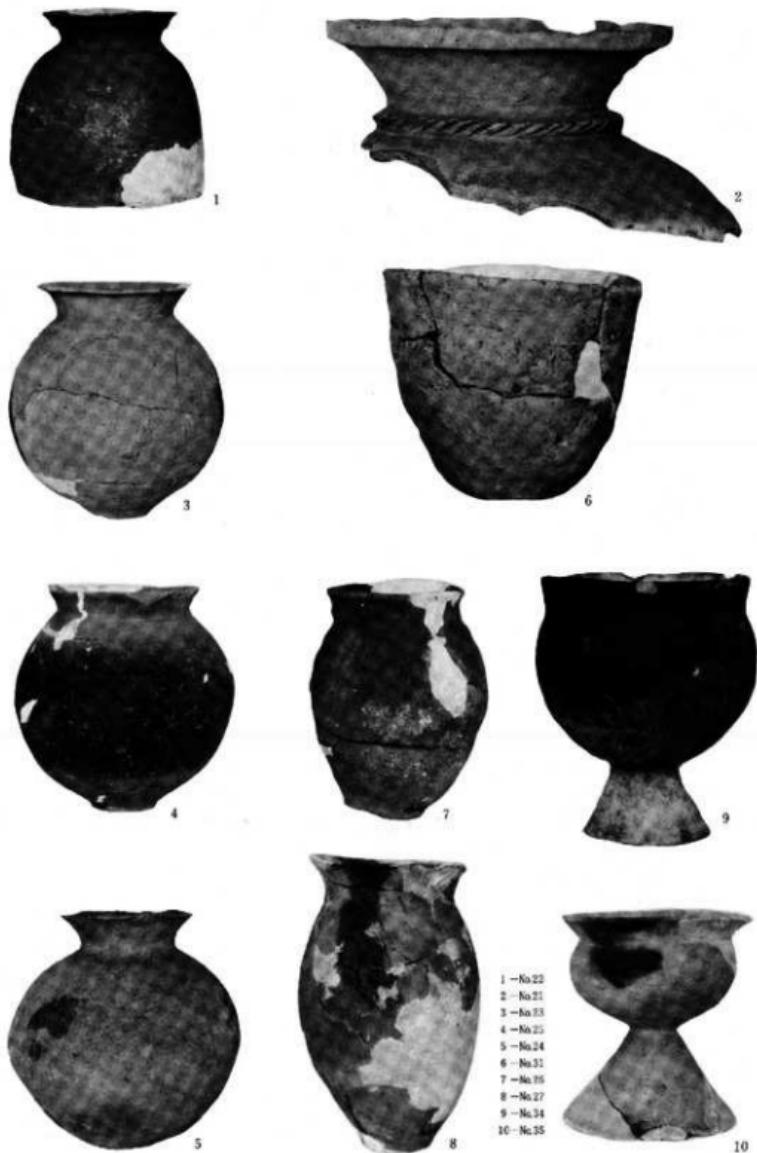
4 - No. 46

8 - No. 50

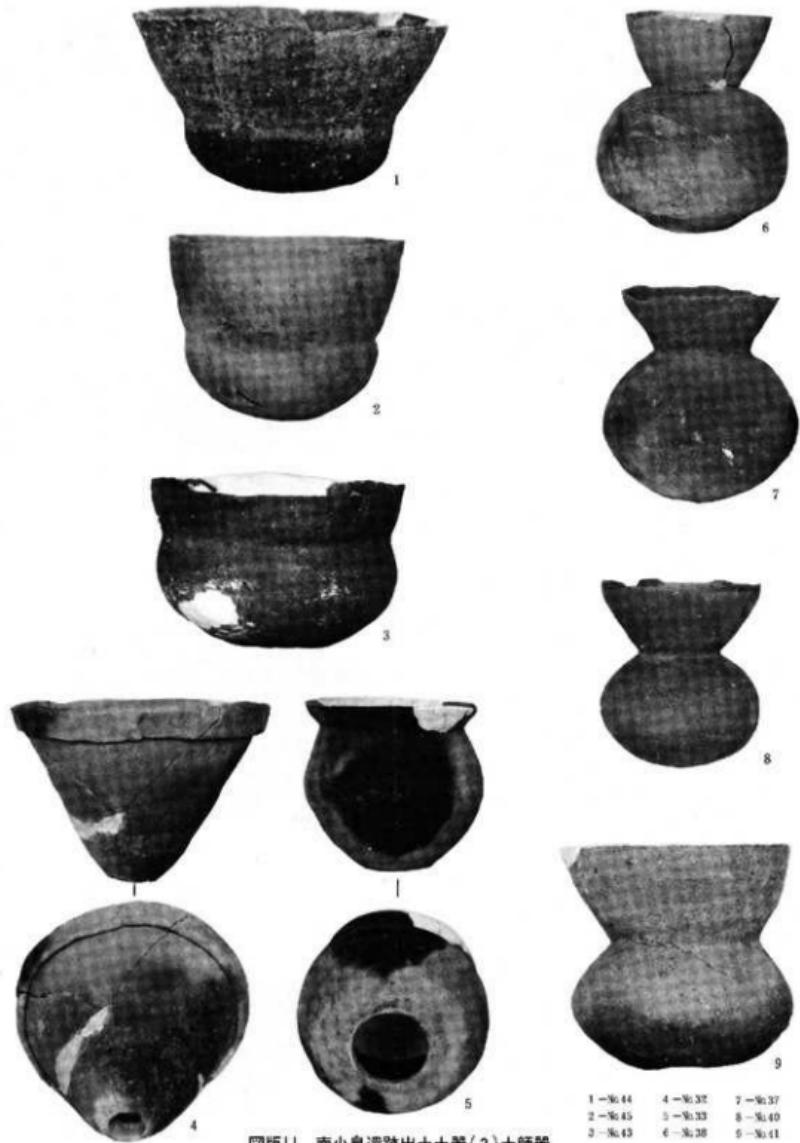
図版 8



図版 9



図版10 南小泉遺跡出土土器(1)土師器



図版III 南小泉遺跡出土土器(2)土師器

1 - 30:44	4 - 30:37	7 - 30:37
2 - 30:45	5 - 30:33	8 - 30:40
3 - 30:43	6 - 30:38	9 - 30:41



1~7 土篩器・8 須惠器
圖版12 南小泉遺跡出土土器(3)土篩器・須惠器

(1) 遺物図版目録-1

No.	図 版 図 写 真	種 別	圖形 (形態)	西 面 図 成 (主な文様)								備 考	保 告
				口 線		縦 線	横 線	体 線		底 線	筋 線		
				外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面		
1	1-1	弥生式土器	森 形	編 文		無 文	無 文						撰 形 式 東北 大学
2	1-2	弥生式土器	森 形	無 文		下端に列点刺 突文	無 文					*	*
3	2-1	弥生式土器	森 形			無 文	撫拭圖文によ る森(印文)					*	*
4	2-2	弥生式土器	変 形				無 文					*	*
5	3-1	弥生式土器	變 形				撫拭圖文			無 文		*	*
6	3-2	弥生式土器	變 形	無 文		下端に列点刺 突文	無 文					*	*
7	3-3	弥生式土器	森 形	2条の沈線	1条の沈線	無 文	沈線による放 文		無 文			*	*
8	3-4	弥生式土器	森 形	3条の沈線	1条の沈線	無 文	沈線による變 形文字文		無 文			*	*
9	3-5	弥生式土器	鉢 形	無 文			無 文		無 文			*	*
10	3-6	弥生式土器	鉢 形	無 文	1条の沈線		3段の連続山 形圖文帶		無 文			*	*
11	3-7	弥生式土器	鉢 形	無 文	(3対の山形) (突起)		沈線による變 形文字文		無 文			*	*
12	3-8	弥生式土器	鉢 形	無 文	(3つの山形) (突起)		沈線による連 続山形文		無 文			*	*
13	4-1	弥生式土器	高环形	編 文	(3対の山形) (突起)		連続山形圖文 帶					*	*
14	4-2	弥生式土器	高环形						連続山形圖文 帶			*	*
15	4-3	弥生式土器	高环形	編 文			無 文					*	*
16	4-4	弥生式土器	高环形	編 文	(4対の山形) (突起)		4段の連続山 形圖文帶		無 文			*	*
17	4-5	弥生式土器	皿 形		1条の沈線		3段の変形連 続山形圖文帶		無 文			*	*
18	4-6	弥生式土器	皿 形	3条の沈線	1条の沈線		無 文		無 文			*	*
19	4-7	弥生式土器	森 形			4段の盛沿	3条の細い半 円状突文					十三 案 式	*

(I) 遺物図版目録-II

No.	圖 版 号	種 別	器形 (形態)	遺 存 位 置	成 形 法 量	色 調	燒 成	過 程 調 成						備 考	保 管		
								外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面		
20	5-1	土師器	壺	体部欠損	口 径 16.9 體部径 8.9	淡黃褐色 淡黃褐色	やや軟質	不明	不明	不明						複合口縫	東北学院大学
21	5-2	10-2	土師器	壺	体部欠損	口 径 17.0	褐色	褐色	良好	ハケメ ↓ ヨコナダ	ハケメ ↓ ヨコナダ	開帯 ↓ 横口式の 側突文	ハケメ ↓ ヨコナダ				東北大學
22	5-3	10-1	土師器	壺	底部欠損 巻上げ	口 径 16.8 體部径 12.2 底面径 24.1	褐色	褐色	良好 黒斑有り	ハケメ ↓ ヨコナダ ハケメ	ヨコナダ ↓ ハケメ	ヘラケズリ ナダ ナダ	ヘラケズリ ナダ ナダ			折返し口縫	*
23	5-4	10-3	土師器	壺	完形 巻上げ	口 径 28.5 體部径 14.3 底面径 23.9 高 度 7.7	褐色 に赤い褐色 に赤い褐色	良好 一部黒斑	ヨコナダ ナダ	ヨコナダ ナダ ナダ	ヘラケズリ ナダ ナダ	ヘラケズリ ナダ ナダ	ヘラケズリ ナダ ナダ	ヘラナダ ヘラケズリ ヘラナダ	口縫端部外反部 球形	*	
24	5-5	10-5	土師器	壺	底部欠損	口 径 15.3 體部径 10.5 底面径 26.7	褐色	褐色	良好	ヘラナダ ↓ ヘラミガキ	ヘラナダ ↓ ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ ↓ ヘラミガキ	ヘラナダ ヘラミガキ ↓ ヘラミガキ			胎土に粗沙を多く 含む 体窓球形	*
25	5-6	10-4	土師器	壺	完形 巻上げ	口 径 28.5 體部径 16.1 底面径 26.4 高 度 8.3	褐色 中位に黒縛の 褐色	褐色	良好	ヨコナダ	ヨコナダ	ヘラナダ ↓ ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	体部球形	*
26	6-1	10-7	土師器	壺	口縫一部欠損	口 径 32.1 體部径 17.5 底面径 14.9 体窓径 20.4 底面径 6.5	褐色 暗褐色	褐色	やや軟質	ヨコナダ	ヨコナダ	ヘラケズリ * ヘラナダ	ヘラナダ			長胴壺 頭部に重ねた縫合	*
27	6-2	10-8	土師器	壺	部分的欠損有り	口 径 32.1 體部径 17.5 底面径 14.9 体窓径 20.4 底面径 6.5	褐色 灰褐色	黄褐色	良好 一部黒斑	ヨコナダ ヨコナダ	ハケメ ↓ ヨコナダ	ハケメ ↓ ヘラナダ ヘラミガキ	上位ハケメ 中・下位ハ ナダ	ヘラケズリ? ヘラナダ	長胴壺	*	
28	6-3	土師器	壺	口縫一体 筒	口 径 16.1 體部径 14.9	に赤い褐色 に赤い褐色	に赤い褐色	やや軟質	ヨコナダ	ヨコナダ	ナダ	ヘラナダ			長胴壺 頭部に重ねた縫合	東北学院大学 がある	
29	6-4	土師器	壺	口縫一体 筒	口 径 14.3 體部径 11.6 底面径 17.3			軟質	不明	ヨコナダ	不明	不明	ヘラナダ		口縫外反の後退立 長胴壺	*	
30	6-5	土師器	壺	完形	口 径 12.9 口 径 15.6 體部径 14.4 体窓径 15.0 高 度 5.0	褐色	褐色	良好	ヨコナダ	ヨコナダ ↓ ナダ	ハケメ ↓ ナダ	ヘラナダ	ヘラケズリ ヘラナダ			東北大學	

(I) 遺物図版目録一四

No.	図版 写真	種別 (形態)	遺存位 (部位)	成形 法	色調 外面 内面	焼成 度	表面		裏面		底面		備考	保管		
							外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面				
31	6-6	10-6	土師器 体	はは形 巻上げ?	高 10.0 口 径 12.5 底 径 7.0	浅黄褐色 浅黄褐色	良好	ヨコナダ	ヨコナダ	↓	ヘラケズリ ヘラミガキ ヘタケズリ	ヘラナダ ヘラミガキ ヘラケズリ	ナダ ヘラナダ		東北大學	
32	6-7	11-4	土師器 瓶	丸形 巻上げ	高 15.1 口 径 20.6 孔 径 2.7	褐色 褐色	褐色	良好	ヨコナダ	ヨコナダ	↓ ナダ	ヘラナダ		山間に粘土組を 巻く 円筒形容	*	
33	6-8	11-5	土師器 瓶	口縁の一部欠損	高 20.0 口 径 22.4 腹部径 18.7 体部径 23.6 孔 径 8.9	浅黄褐色 浅黄褐色	良好	ハケメ ↓ ヨコナダ	ハケメ ↓ ヨコナダ	ハケメ ↓ ヨコナダ	ハケメ ↓ ナダ	ハケメ ↓ ヘラナダ	ハケメ		*	
34	7-1	10-9	土師器 台付瓶	丸形	高 13.4 口 径 10.7 腹部径 10.2 体部径 11.5 台上径 3.3 台底径 6.7 孔 高 3.4	褐色-端褐色 上部黒褐色	下部黒褐色	2次焼成を受 ける	ヨコナダ	ヨコナダ	不明	ナダ	ヘラナダ ヨコナダ	ヘラナダ ↓ ヨコナダ		*
35	7-2	10-10	土師器 立付瓶?	部分的欠損有り	高 17.0 口 径 13.9 腹部径 12.0 体部径 13.3 台上径 3.9 台底径 13.9 孔 高 7.8	にいき褐色 にいき褐色	にいき褐色	良好	ヨコナダ + ヘラミガキ	不明	不明	ヘラミガキ	ヘラミガキ ヘラミガキ	ナダ	台部に火捺痕なし	*
36	7-3	上師器 台付瓶?	脚部欠損		口 径 11.8 体部径 11.8	にいき黃褐色 にいき黃褐色	やや軟質							口縁型かく、外反	東北学院大学	
37	7-4	11-7	土師器 瓶	丸形 巻上げ	高 15.2 口 径 12.0 口縁高 4.5 腹部径 7.3 体部径 14.6 底 径 3.6	赤褐色 赤褐色	良好	ヨコナダ	不明	不明	下部 + ヘラケズリ	不明	ヘラケズリ 不明		東北大學	
38	7-5	11-6	土師器 瓶	口縁の一部欠損 巻上げ	高 16.1 口 径 10.9 口縁高 5.5 腹部径 6.7 体部径 14.9 底 径 6.4	黄褐色 黄褐色	良好	ヘラミガキ	ヘラミガキ		ヘラミガキ	不明	ナダ ナダ			
39	7-6		土師器 壺	底部欠損	高 11.4 口 径 4.0 腹部径 7.4 体部径 14.8	にいき青褐色 にいき青褐色	良好	ヨコナダ ↓ ヘラミガキ			上位ナダ 下位 ヘラケズリ	ナダ			東北学院大学	

(1) 遺物図版目録一覧

No.	図版 図 号	種別	器形 (形態)	遺存 部位	成形	法量	色調		焼成	表面						備考	保管
							外 面	内 面		外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面		
40	7-7	11-8	土師器 壺	直	口縁の一部欠損		器高 13.5 口径 11.1 口縁高 5.5 腹部径 6.3 体深径 12.4 底径 4.3	赤褐色 赤褐色	赤褐色 良好	ヨコナデ ナデ ↓ ハラミガキ		上位ナデ 下位ヘラ ケツリ	ナデ	ヘラケツリ		山根城内蔵	東北大
41	7-8	11-9	土師器 壺	立	元形	基上げ	器高 8.2 口径 8.2 口縁高 3.4 に赤褐色 腹部径 5.7 体深径 8.4 底径 3.4	赤褐色 赤褐色	赤褐色 良好	ヨコナデ ヨコナデ		ナデ	ナデ	ナデ		口縁部内蔵	*
42	7-9	土師器 壺	直	完形			器高 6.3 口径 7.8 口縁高 2.4 腹部径 5.3 体深径 7.5 底径 3.2	赤褐色 赤褐色	赤褐色 良好	ヨコナデ ↓ ハラミガキ		ナデ	ヘラケツリ				東北学院大
43	8-1	11-3	土師器 壺	环	はほ	完形	品高 6.6 口径 9.7	赤褐色 赤褐色	赤褐色 良好	ヨコナデ ↓ ハラミガキ	ハラミガキ ハラミガキ	ハケメ	ハラミガキ ハラミガキ	ハラミガキ ヘラケツリ	ヘラミガキ	平底(上げ底)	東北大
44	8-2	11-1	土師器 壺	环	完形	基上げ	器高 5.2 口径 9.2	赤褐色 赤褐色	赤褐色 良好	ヨコナデ ↓ ハラミガキ	ヨコナデ ハラミガキ		ハラミガキ ハラミガキ	ハラミガキ ヘラミガキ	ハラミガキ ハラミガキ	平底(上げ底) 内外面に丹塗	*
45	8-3	11-2	土師器 壺	环	完形	基上げ	器高 12.8 口径 17.7	灰褐色 (底部堅厚)	灰褐色 良好	ヨコナデ ↓ ハラミガキ	ヨコナデ ハラミガキ	ハケメ *	ハラミガキ ハラミガキ	ナデ	ヘラミガキ ヘラミガキ	平底(上げ底)	*
46	8-4	土師器 壺	环	完形	基上げ		器高 7.5 口径 10.4	褐色 褐色	褐色 良好	ヨコナデ ヨコナデ	ナデ	ハラナダ	ヘラケツリ	ヘラナダ	ヘラナダ	平底(上げ底)	仙台市教育委員会
47	8-5	土師器 壺	环	完形	基上げ		器高 8.1 口径 10.2	赤褐色 赤褐色	赤褐色 良好	ヨコナデ ヨコナデ	ナデ	ハラナダ	ヘラケツリ			丸底	東北学院大
48	8-6	土師器 壺	环?	口縁-底部片			器高 10.3 口径 10.4	褐色 褐色	褐色 良好	ヨコナデ ↓ ナデ		ナデ	ハラナダ ヘラケツリ	ヘラナダ	丸底 (底部に炭化物付着)	仙台市教育委員会	
49	8-7	土師器 壺	环	完形			器高 10.0 口径 9.4	褐色 褐色	褐色 良好	ヨコナデ ヨコナデ		ナデ	ヘラケツリ ↓ ナデ	ヘラケツリ ナデ	ナデ	平底	*
50	8-8	土師器 壺	环	完形			器高 5.2 口径 13.2	褐色 褐色	褐色 良好	ヘラミガキ ヘラミガキ		ヘラケツリ ナデ	ヘラミガキ (放射状)			平底	東北大
51	8-9	12-5	土師器 壺	完形	(一部欠損)		器高 5.6 口径 13.8	赤褐色 赤褐色	赤褐色 良好	ヨコナデ ヨコナデ	ハケメ ↓ ヘラケツリ	ハケメ ↓ ヘラケツリ	ハケメ ヘラケツリ	ハケメ ナデ	ハケメ	平底	*

(1) 遺物図版目録 - V

No.	図版 図 写 真	種 別	器形 (形態)	直 存 位	成 形	法 重	色 調		焼 成	各 國 成 底						備 考	保管	
							外 面	内 面		口 外 面	内 面	體 外 面	内 面	感 外 面	内 面	底 外 面	内 面	
52	8-10	12-6	上 鍋 罩	坏	完 形		器 高 5.8 口 径 33.0	口縁部赤褐色 底部灰褐色	良好 一部黒斑	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケツリ ナダ	ヘラミガキ	九連(内側及外側) 環状内壁	東北 大学	
53	8-11	12-6	土 鍋 罩	坏	は ば 完 形		器 高 6.3 口 径 13.1	相色	にぶい褐色	良好	ヘラミガキ	ヘラミガキ						*
54	9-1	12-1	土 鍋 器	器台	一部欠損有り		器 高 12.4 上部底 11.7 底部底 11.3	にぶい橙色	赤褐色	良好	ハケメ	ハケメ	ハケメ	不明	ハケメ	ハケメ		*
55	9-2		土 鍋 罩	器台	は ば 完 形		器 高 8.0 口 径 7.4 周囲底径 3.4 器台底径 10.7	明黄褐色	明褐色	良好	不明	ヘラミガキ			ヘラミガキ	不明	3万透孔	東北学院大学
56	9-3		土 鍋 罩	器台	接続部 片		器 高 3.5		良好						ナダ	不明		*
57	9-4		土 鍋 罩	高坏	は ば 完 形	巻上げ	器 高 15.2 口 径 23.3 底 17.8	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナダ	ヘラミガキ	ヨコナデ	口縁端水平	仙台市教育委員会
58	9-5	12-2	上 鍋 罩	高坏	光 形	巻上げ	器 高 16.1 口 径 10.9 底 14.5	器 高 11.1 口 径 18.1 底 13.0	橙色	褐色	良好	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ	不明	ヘラミガキ	ナダツケ	ヨコナデ	ヨコナデ	東北 大学
59	9-6	12-3	土 鍋 罩	高坏	片 残 存	巻上げ	器 高 11.8 口 径 18.1 底 13.0	淡黃褐色	淡黃褐色	良好	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケツリ ナダ	ヘラミガキ	ヨコナデ		*
60	9-7		土 鍋 罩	高坏	坏 部		器 高 15.8 环部高 4.5	淡黃褐色	淡黃褐色	良好	下位ナダ	不明						東北学院大学
60	9-8		上 鍋 罩	高坏	坏 部		器 高 16.7 环部高 5.3	黃褐色	黃褐色	良好	ヘラミガキ	ヘラナデ ↓ ヘラミガキ						*
62	9-9		土 鍋 罩	高坏	坏 部 片						ヨコナデ	ヘラミガキ						*
63	9-10		土 鍋 罩	高坏	坏 部		器 高 23.9 环部高 5.4	褐色	褐色	良好	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ						*
64	9-11		上 鍋 罩	高坏	脚 部		脚部高 9.2 脚部径 13.2					ヘラミガキ	ナダツケ	不明	ヨコナデ		*	
65	9-12		土 鍋 器	高坏	脚 部 片			褐色	褐色	良好		ヘラミガキ	ナダ				*	
66	第108回	12-8	須 恵 罩	直	完 形		器 高 5.0 口 径 12.0	灰色	灰色	良好 (海光焰)	ロクロナダ	ロクロナダ	天井部外側 天井部外側 回転ヘラ ケツリ	ナダ			東北 大学	

(2) 発掘調査出土物目録-1

No.	種別 (形態)	遺存 (部位)	成形	法 規		色 調		焼 成		器 形				内 面				外 面				部 品				備 考				出上状況		保管		
				幅 × 横 × 厚 (cm)	縦 × 横 × 厚 (cm)	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面												
1	土器	甕	体部下半身	ロクロ未使用				20×14×0.7	に赤い褐色	黒	褐色	良好	好	一	一	一	一	ハケメ	ヘラナデ	ヘラケズリ	ナード	ヘラミガキ	部球形	松葉トレンチ2層上		仙台市教育委員会	写真							
2	土器	甕	体部	ロクロ未使用				4×1.5×0.5	に赤い褐色	に赤い褐色	良好	好	一	一	一	一	ハラナデ	ヘラナデ	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	2層中	×		
3	土器	甕	口縁部片	ロクロ未使用				2.5×4.5×0.8	褐	褐色	褐色	良好	好	ヘラミガキ?	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
4	土器	甕?		ロクロ未使用				1.5×1.5×0.6	褐	褐色	褐色	2次焼化	好	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
5	土器	甕	体部片	ロクロ未使用	6×4.3×0.5	に赤い褐色	に赤い褐色	良好	好	一	一	一	一	一	一	一	一	ハケメ	不 明	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	動土に砂を多く含む	×			
6	土器	甕	体部片	ロクロ未使用	5×5×0.7	褐	褐色	褐色	良好	好	一	一	一	一	一	一	一	不	男	不	明	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
7	土器	甕?	体部片	ロクロ未使用	2×2×0.3	褐	褐色	褐色	良好	好	一	一	一	一	一	一	一	ハケメ	ヘラミガキ	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
8	土器	甕	口縁一部片	ロクロ未使用	4×2×0.4	褐	褐色	褐色	良好	好	ヘラミガキ	不明	不	明	不	明	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	細かい劣化する口縁	一		
9	土器	甕	体部片	ロクロ未使用	3×3×0.6	黑	褐色	褐色	良好	好	一	一	一	一	一	一	一	ハケメ	ヘラナデ	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
10	土器	甕?	体部片	ロクロ未使用	3×3×0.5	褐	褐色	褐色	良好	好	一	一	一	一	一	一	一	ハケメ	ナード	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
11	土器	甕	口縁一部片	ロクロ未使用	3×2×0.5	褐	褐色	黑色	良好	好	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヨコナデ	ヘラミガキ	一	一	一	内	黒	外	反	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
12	土器	甕	口縁部片	ロクロ未使用	3×2.5×0.5	黑	褐色	黑色	ヨコナデヨコナデ	ヨコナデ	ヘラミガキ	一	一	一	一	一	一	内	黒	外	反	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
13	土器	甕	体部片	ロクロ未使用	3×3.5×0.7	褐	褐色	褐色	良好	好	一	一	一	一	一	一	一	ハケメ	ヘラナデ	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
14	土器	甕	環	ロクロ未使用	3×3×0.5	黑	黑色	黑色	良好	好	一	一	一	一	一	一	一	不	明	一	ヘラケズリ	ヘラミガキ	丸底	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
15	土器	甕	小片78点	ロクロ未使用																														
16	土器	甕?	口縁部片	ロクロ未使用	3.5×3.6×0.3	に赤い黃褐色	に赤い黃褐色	良好	好	ヘラミガキ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	14-5	一	
17	土器	甕	口縁部片	ロクロ未使用	4.5×12.5×0.5	淡黄	褐色	褐色	やや軟質	ヨコナデ	不	明	ヨコナデ	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	14-4	20-4	
18	土器	甕	体部片	ロクロ未使用	7×5.5×0.6	に赤い黃褐色	に赤い黃褐色	良好	好	一	一	一	一	一	一	一	一	ナード	ヘラナデ	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
19	土器	甕?	底部片	ロクロ未使用	4×3×0.9	赤	褐色	褐色	2次焼化	好	一	一	一	一	一	一	一	ヘラミガキ	ヘラミガキ	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
20	土器	甕?	体部片	ロクロ未使用	3.5×3×0.4	淡	褐色	褐色	良好	好	一	一	一	一	一	一	一	ヘラケズリ	ヘラケズリ	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
21	土器	甕?	体部片	ロクロ未使用	10×110×0.5	淡	褐色	褐色	良好	好	一	一	一	一	一	一	一	ヘラケズリ	ヘラナデ	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
22	土器	甕?	小片5点	ロクロ未使用																														
23	土器	甕?	環	ロクロ未使用	5×7.5×1.0	褐	褐色	褐色	良好	好	脚部外側	脚部内側	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	14-2	20-3	一	
24	土器	甕?	体部片	ロクロ未使用	6×5.5×0.5	に赤い褐色	に赤い褐色	やや軟質	一	一	一	一	一	一	一	一	一	ヘラナデ	ヘラナデ	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
25	土器	甕?	不明	ロクロ未使用	3×3×0.5	淡黄	褐色	黑色	良好	好	一	一	一	一	一	一	一	ヘラミガキ	ヘラミガキ	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
26	土器	甕?	高环	床底部中央	ロクロ未使用	2×2.5×1.5	に赤い褐色	に赤い褐色	良好	好	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一		

(2) 南小泉遺跡発掘調査出土遺物目録-II

No.	種別 (形態)	遺存 (部位)	成形	法 材 色		焼成 寸法 幅×高×厚(mm)	器 部 鋼 鍋 成						備考	出上状況	図写真	保管		
				外面	内面		口縁部	裏部	胴部	体部	一部	底						
外	内	外	内	外	内	外	内	外	内	外	内	外	内	外	内	外		
27	弥生式土器 裏?	肩 部 片	ロクロ未使用	5×7×0.6	に bei 黄褐色	良										小形構 - 2 塵土	14-6 20-5	柏台山教育委員会
28	上 鋸 鋸	小片5点	ロクロ未使用														*	*
29	上 鋸 鋸	裏 体 部 片	ロクロ未使用	2.6×4.5×0.7	褐 色	褐 色	やや軟質					不明 不 制				小形構 - 3 塵土	*	*
30	十 鋸 鋸	裏 体 部 片	ロクロ未使用	3×3×0.5	褐 色	褐 色	褐 色	良好				不明 不 制				*	*	
31	土 鋸 鋸	小片12点	ロクロ未使用 と思われる													*	*	
32	瓦	平瓦		6×8×2.3	灰 白 色	灰 白 色	良 (原元胎)	陶 瓦 直	直	内 面	外 面				構状追拂	15-2 20-6	*	
33	瓦	丸瓦 五線部片		7×6×1.7	に bei 棕色	に bei 棕色	やや軟質 (酸化胎)	ケズリ ナ デ								*	20-7	*
34	瓦	丸瓦 五線部片		4.5×6×1.4	棕 色	棕 色	やや軟質 (酸化胎)	布 日 ナ デ								*	20-8	*
35	土 鋸 鋸	高环 腹 部 片	ロクロ未使用	中央部径 3.8	褐 色	褐 色	2次焼成	不 明 互 直							支脚に転用された可能性有り(高環小式)	人 14-3 20-2	*	
36	上 鋸 鋸	坏 底 部 片	ロクロ未使用	6.5×3.5×0.6	浅 黄 棕 色	黑	良好					ヘラケズリ ハラミガキ	ヘラミガキ	内 地	*	為	*	
37	十 鋸 鋸	裏 体 部 片	ロクロ未使用	3×4.5×0.8	黑	黑	以好		ナ デ	ヘラケズリ ハラミガキ	ナ デ			外 反	*	堆	*	
38	十 鋸 鋸	裏 体 部 片	ロクロ未使用	3.5×2.5×0.7	黑	黑	良好			ハケメ	不 明				*	堆	*	
39	十 鋸 鋸	裏 口縁部片	ロクロ未使用	2.2×3×0.5	浅 黄 棕 色	灰	白 以好	ヨコナ デ	ヨコナ デ						ゆるやかに外反	上	*	
40	十 鋸 鋸	裏 体 部 片	ロクロ未使用	4.5×4×0.5	に bei 黄褐色	灰	白 以好			ヘラケズリ ハラミガキ	ナ デ			*	中	*		
41	土 鋸 鋸	高环 腹花上端片	ロクロ未使用	2.5×3				外 面 内 面							*		*	
42	上 鋸 鋸	小片4枚													*		*	
43	復 息 崩?	体 部 片?	ロクロ使用	1.2×1.3×0.3	褐 灰 色	褐 灰 色	良 (原元胎)								*		*	
44	鉢 製 品	小片		幅 1.4 厚 0.25												15-7 20-16	*	
45	上 鋸 鋸	口縁部片	ロクロ未使用	2.7×4.0×0.6	に bei 黄褐色	に bei 黄褐色	やや軟質	不 明 不 明				野返し 口縁 (直釜式)					*	
46	上 鋸 鋸	不明 不 明	ロクロ未使用	2×2.8×0.6	黑 褐 色	浅 黄 棕 色 (一部小孔)	やや軟質	不 明 ヘラミガキ				内 面 月 直					*	
47	上 鋸 鋸	裏 肩 部 片	ロクロ未使用	3.3×3.7×0.9	褐 色	黑 褐 色	やや軟質								油土に砂を多く含む		*	
48	七 鋸 鋸	小片9点	ロクロ未使用 のものはない														*	
49	弥生式土器	裏 体 部	焼成後24.2 程度23.4	3×3.5×0.6	褐 ~ 棕 色	に bei 黄褐色	良好		L R 織文	ヘラケズリ		底 海 に 市 の 所			14-1 20-1	*		
50	瓦 平瓦			12×12.5×2	黑	黑	良 (原元胎)	外 面 内 面						釣穴有り(近里山房)	第1層(耕作土)	*		
51	瓦 平瓦			10×10×1.8	褐 褐 色	褐 褐 色	良								*	*		
52	上 鋸 鋸	裏 口縁部片	ロクロ未使用	3×5.5×0.6	に bei 黄褐色	明 黄 褐 色	良好	ハラケメ ヨコナ デ	ヘラミガキ			外 反 壇 部 平 直			*	*		

(2) 南小泉遺跡発掘調査出土遺物目録-III

No.	種別 (形態)	直形 (部位)	成形	法量 (横×縦×厚)(cm)	色調 外面 内面	焼成 外面 内面 外面 内面	器形 口縁 部 分				備考 出土地図 可否	保管		
							面	面	部	分				
53	器物式土器	裏 体 部 片	ロクロ未使用	3×4×0.6	褐色 灰青褐色	良好					LR 織文 ハラナデ?			
54	土 器 壺	口縁 部 片	ロクロ未使用	3×3×0.6	黒 黒	良好	ヨコナダ	ハラミガキ				第1回(耕作上) 外反の後内返		
55	土 器 壺	裏 体 部 片	ロクロ未使用	3.5×2.5×0.7	黒 黑	良好			ハケメ			直立の後外反		
56	上 鋼 国	裏 陶 部 片	ロクロ未使用	4×5×0.6	橙 色 橙 色	良好		ハラミガキ (横位)	ハラミガキ (横位)	ハラミガキ (横位)	ハラナデ	ゆるく外反		
57	土 器 壺	口縁 部 片	ロクロ未使用	2×3.2×0.4	橙 色 橙 色	良好	ハラミガキ	ハケメ						
58	土 器 壺	口縁 部 片	ロクロ未使用	2.6×3.2×0.3	橙 色 橙 色	良好	ハラミガキ (横位)	ハラミガキ (横位)				体部様形		
59	土 器 壺	裏 体 部 片	ロクロ未使用	10×11×0.7	暗 褐 色	に赤い褐色	良好		ハラケズリ	ハラナデ				
60	上 壺 壺	高坏	板瓦-陶上部	2×6	橙 色 橙 色	良好								
61	土 器 壺	底 部 片	ロクロ未使用	3.3×6.5×1.5	橙 色 橙 色	良好								
62	上 鋼 国	裏 口縁 部 片	ロクロ未使用	4.2×5×0.7	浅 赤 色	に赤い 褐色や軟質	不明	ハラミガキ						
63	上 鋼 国	裏 底 部 片	ロクロ未使用	5.5×6×0.5	褐 色 褐 色	良好			ハラケズリ	ハラナデ	端部半丸			
64	土 器 壺	不明 口縁 部 片	ロクロ未使用	4×7×0.9	橙 色 橙 色	やや軟質	不明	ハラミガキ						
65	上 鋼 国	裏 体 部 片	ロクロ未使用	4.5×5.5×0.6	橙 色 暗褐色	良好		ハケメ	ハラナデ			粘土に砂を多く含む		
66	上 鋼 国	裏 口縁 部 片	ロクロ未使用	2.2×4.5×0.3	橙 色 橙 色	良好	ハラミガキ (横位)	不明				粘土に砂を多く含む		
67	土 器 壺	裏 体 部 片	ロクロ未使用	5.5×6.3×0.4	に赤い褐色	に赤い褐色	良好			ハラケズリ	ハラナデ			
68	土 器 壺	裏 体 部 片	ロクロ未使用	5.5×7×0.6	暗 褐 色	灰 褐 色	良好		ハラミガキ	不明				
69	土 器 壺	高坏 脊 部 片	ロクロ未使用	上部2.9	橙 色 橙 色	良好						棒状の間で空洞がない		
70	土 器 壺	裏 口縁 部 片	ロクロ未使用	4×4×0.8	に赤い褐色	に赤い褐色	良好	外面 ハラミガキ	内面 ハラミガキ	外 内		複合口縁の頸部		
71	土 器 壺	裏 体 部 片	ロクロ未使用	5×5×0.6	橙 色 橙 色	やや軟質								
72	土 器 壺	裏 体 部 片	ロクロ未使用	5×7×0.9	黒 橙 色	良好		ハラケズリ	不明			木葉紋		
73	上 鋼 国	裏 底 部 片	ロクロ未使用	3×4.8×0.9	橙 色 暗褐色	やや軟質		ハラケズリ	不明					
74	土 器 壺	鋸 体 部 片	ロクロ未使用	3.3×5.5×0.8	に赤い褐色	黒 良好	ヨコナダ	ハラナデ	ハケメ	ハラナデ				
75	上 鋼 国	裏 底 部 片	ロクロ未使用	3×3.5×1.1	黒 橙 色	良好				ハラケズリ	不明	环底部か? 内底		
76	土 器 壺 不 刻	不 刻	ロクロ未使用	4.5×4×0.8	橙 色 暗褐色	良好	外 ハラミガキ	内 ハラミガキ						
77	土 器 壺	裏 体 部 片	ロクロ未使用	3.2×1.8×0.6	黒 黑	良好		ハラミガキ	ハラミガキ			南小泉式		
78	上 鋼 国	高坏 脊 部 片	ロクロ未使用	厚3.0.8	赤黄褐色	淡黄褐色	良好	外 ハラミガキ	内 ハラミガキ			南小泉式		

(2) 南小泉遺跡発掘調査出土遺物目録 - IV

No.	種別	图形 (形態)	通号 (部位)	成形	法 規(横×縦×厚)(cm)	色調		焼成	器・皿・周・底						備考	出土状況	保管	
						外面	内面		口	縁	部	底	部	体	部	内	面	
79	土器	高杯	口縁部片	ロクロ使用	口径 15.5 厚さ 0.4	灰 黄褐色	灰 黄褐色	やや軟質 (焼元火)	不 明	L						ゆるやかに外反し て広がる	第1層(耕作上)	仙台市教育委員会
80	土器	杯	口縁部片	ロクロ使用	2.5× 5 ×0.5	橙 色	黒	良好									*	*
81	土器	高	体部	削	5.2× 5.1×0.6	にい 黄褐色	にい 黄褐色	良好								腹部下端に	*	*
82	土器	高	底	片	ロクロ使用	4× 6 ×1	淡 黄褐色	淡 黄褐色	(焼化粧)	良好						ロクロナデ ロクロナデ	圓軌系切底	*
83	先史式土器	高	体 部	片	3.5× 6 ×0.5	にい 黄褐色	にい 黄褐色	良好								LR 純文 不 明		
84	須恵器	蓋	口縁部片		3.7X 3.3×0.5	灰 色	灰 白 色	ロクロナデ (焼元火)	不 明	ロクロナデ						2条の帶縫細い縦 状文		14- 7 20- 9
85	須恵器	蓋	体 部	片	1.8× 2.7×0.8	暗 灰 色	暗 灰 色	良好 (焼元火)		格子印	日	不 明					*	*
86	須恵器	蓋	体 部	片	4.5× 4 ×1	暗 灰 色	暗 灰 色	良好 (焼元火)		銘柄子印	ハナ	テ					*	*
87	須 恵 器	蓋	体 部	片	2.3× 4.5×0.4	暗 灰 色	暗 灰 色	良好 (焼元火)		平行印	青 海波文						14- 8 20-10	*
88	須 恵 器	蓋	体 部	片	5× 9.8×0.9	暗 灰 色	暗 灰 色	良好 (焼元火)		平行印	日	不 明					15- 1 20-11	*
89	須 恵 器	蓋	側 部	片	3.4× 3.8×0.7	灰 黄褐色	灰 黄褐色	良好 (焼元火)		ロクロナデ						圓面に傳い自然釉	*	*
90	須 恵 器	蓋	体 部	片	3× 3.5×1.1	黑 色	褐 色	良好 (焼元火)		ナ	デ						*	*
91		瓦	平瓦		3.8× 2.2×1.5	暗 灰 色	暗 灰 色	良好 (焼元火)								瓦片有り(近世以前)	*	*
92	陶器	甕	体 部	片	ロクロ使用	7× 8.2×0.8	灰 褐 色	灰オーライブ色 (焼元火)	良好	ロクロナデ	ロクロナデ					外面に褐色斑 内面に緑色斑	*	*
93	陶器	甕	体 部	片	ロクロ使用	2.4× 4.5×0.6	墨 初 色	墨 初 色	やや軟質 (焼元火)	ナ	デ	ロクロナデ					*	*
94	陶器	甕	底	部	ロクロ使用	2.6× 2.7×0.6	にい 棕 色	にい 棕 色	良好 (焼化粧)						ロクロナデ	圓軌系切	*	
95	陶器	甕	洗鉢	体 部		4× 3.5×0.5	灰 白 色	灰 月 色 (焼元火)	良好 (焼元火)							側面白透明白	*	*
96	陶器	甕	人形?	体 部	ロクロ使用	7× 7 ×0.8	灰 黄 色	灰 黄 色 (焼元火)	良好 (焼元火)	ロクロナデ	ロクロナデ					白色釉	*	*
97	陶器	甕	小片	6点														*
98	陶器	皿	底一枚部片	ロクロ使用	4× 2 ×0.4	明 綠 色	灰色	明 楊 灰 色 (焼元火)	良好	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	青色の草文或井地	*	*	
99	陶器	皿	底	部	片	1.5× 4 ×0.4	明 綠 色	灰色 (焼元火)	良好	ロクロナデ	ロクロナデ				青色の松葉文	*	*	
100	陶器	品	不明	破片	11点												*	*
101	陶器	品	不明			畫紋 瓷	5.5× 3.5×2	褐 色									15- 3 20-12	*
102	石製櫛道具	刷形	底部欠損	滑	石	(焼元火) 3.9 3.5	暗 綠 色									圓面から穿孔	15- 4 20-14	
103	石製櫛道具	不明		私板	岩	(焼元火) 3.9 3.4	黒									内石繩痕有者	15- 6 20-13	
104	石製櫛道具	刷形	両端部欠損	滑	石	(焼元火) 3.1 0.5	暗 綠 色									伝それが者しい	15- 5 20-15	
105	土器	甕	小片数点															

(3) 分布調査採掘遺物目録一

番号	種別	形状	部位	大きさ	色		焼成度	成形法	調査箇所		その他の	図版の番号			
					外	内			外	内					
1-1	須恵器	壺	部	2.9×3.0×0.8	灰	灰	良	好	ロクロ使用	ナデ、ハケ目	ハケ目				
1-2	"	壺	部	2.6×1.9×0.4	灰	白	灰	白	"	"	ハケ目				
1-3	土師器	壺	部	2.1×1.6×0.5	黒	灰	白	良	好	ロクロ使用	ハケ目	ハケ目			
2-1	須恵器	壺	部	2.1×1.6×0.5	黒	灰	白	良	好	ロクロ使用	ハケ目	ハケ目			
2-2	土師器	壺	部	2.1×1.6×0.5	黒	灰	白	良	好	ロクロ使用	ハケ目	ハケ目			
3-1	土師器	壺	口縁部	4.3×3.6×0.9	浅黄緑	浅黄緑	灰	黄	軟	ロクロ未使用	ケズリ	ナデ			
3-2	"	壺	口縁部	4.3×3.6×0.9	浅黄緑	浅黄緑	灰	黄	軟	ロクロ未使用	ケズリ	ナデ			
4-1	須恵器	壺	底部	5.8×3.5×0.7	黒	褐	灰	白	良	好	ロクロ使用	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目		
4-2	"	壺	底部	3.5×4.2×0.8	褐	灰	灰	白	"	"	ロクロ未使用	ケズリ	タカキ		
4-3	"	壺	底部	3.5×2.5×0.7	灰	褐	灰	白	"	"	"	ケズリ			
4-4	"	壺	底部	3.6×2.4×0.9	灰	白	灰	白	"	"	ロクロ使用	タタキ	ハケ目		
4-5	"	壺	底部	3.6×5.7×0.3	灰	灰	灰	白	"	"	"	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目		
4-6	土師器	壺	底部	3.3×3.0×0.4	にい赤緑	淡黄	やや軟質	軟質	ロクロ未使用	ハケ目	ハケ目				
4-7	"	壺	底部	5.9×3.0×0.8	浅黄緑	淡黄緑	軟質	軟質	"	"	"	調耗している			
4-8	"	壺	底部	5.8×3.0×0.8	緑	緑	良	好	ロクロ未使用	ハケ目	ハケ目	調耗している			
4-9	"	壺	底部	5.8×3.0×0.8	緑	緑	良	好	ロクロ未使用	ハケ目	ハケ目	小片20枚			
4-10	石製品	器	部	2.6									滑石製の有孔円盤、ほぼ完全である		
5-1	須恵器	壺	部	3.5×4.7×0.7	灰	灰	良	好	ロクロ使用	ハケ目	ハケ目	外側に彫りハラキ有り	第9図		
5-2	土師器	壺	部	3.4×2.6×0.5	浅黄緑	浅黄緑	軟質	軟質	"	"	"	小片2点			
5-3	"	壺	部	3.4×2.6×0.5	浅黄緑	浅黄緑	軟質	軟質	"	"	"	小片6点			
6-1	土師器	壺	口縁部	2.7×2.8								内面クタキは青海波文			
7-1	須恵器	壺	底部	8.0×3.9×1.1	暗	灰	灰	白	良	好	ロクロ未使用	タタキ	タタキ		
7-2	"	壺	底部	4.0×4.0×0.7	灰	灰	灰	白	"	"	ハケ目	ハケ目			
7-3	"	壺	底部	4.1×3.2×0.8	黄	灰	灰	白	"	"	タタキ	ケズリ			
7-4	"	壺	底部	3.2×1.5×0.7	褐	灰	褐	灰	"	"	"	"			
7-5	"	壺	底部	3.5×2.1×0.4	褐	褐	褐	灰	"	"	スリケン	内面は青海波文のスリケン			
7-6	土師器	壺	口縁部	3.7×2.9×0.7	灰	黄	褐	灰	やや軟質	"	ケズリ	"			
7-7	"	壺	口縁部	3.0×3.9×0.7	褐	褐	褐	赤	軟	"	"	調耗して調整不明			
7-8	"	壺	口縁部	2.7×2.8								小片35枚			
7-9	石製品	器	部	2.7×2.8								石路、鉢岩	第8図		
7-10	古鏡	鏡	部	6.1								富士宝室			
8-1	須恵器	壺	内壁部	7.3×5.7×0.8	灰	灰	良	好	ロクロ未使用	圧	ケズリ	楔形片足、体部外蓋に壓痕	第17図		
8-2	"	壺	内壁部	3.2×3.1×1.1	黄	灰	灰	赤	"	"	ケズリ	"			
8-3	"	壺	内壁部	4.0×2.0×1.0	灰	褐	灰	白	"	"	ハケ目	ハケ目			
8-4	"	壺	内壁部	3.4×3.7×0.5	褐	灰	褐	白	"	"	ケズリ	"			
8-5	"	壺	底部	4.7×3.5×0.8	灰	白	灰	白	不純物付着	ロクロ使用	"	ナデ			
8-6	"	壺	底部	4.7×3.5×0.8	灰	白	灰	白	"	"	"	小片2点			
8-7	土師器	壺	口縁部	6.3×4.0×0.6	淡黄	淡黄	黄	黄	良	好	ロクロ使用	ナデ	ナデ		
8-8	"	壺	口縁部	4.9×4.0×1.0	褐	灰	白	白	"	"	ロクロ未使用	ケズリ	砂特龍入		
8-9	"	壺	口縁部	3.6×3.1×0.8	褐	褐	褐	白	"	"	"	調耗がほげしい			
8-10	"	壺	口縁部	3.2×2.5×0.6	浅黄緑	浅黄緑	良	好	ロクロ未使用	ケズリ	"	小片10枚			
8-11	須恵器	壺	底部	3.0×2.5×0.6	黒	褐	灰	良	好	ロクロ未使用	タタキ	ナデ	外側に難が見られる		
10-1	須恵器	壺	底部	2.1×2.0×0.4	黄	灰	黄	白	やや軟質	"	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目			
10-2	"	壺	底部	3.5×2.7×1.0	褐	褐	軟質	白	"	"	"	"			
10-3	土師器	壺	底部	3.0×3.2×0.5	にい	にい	にい	白	良	好	ロクロ未使用	ミガキ	ケズリ		
10-4	"	壺	底部	7.2×7.5×1.3	淡赤	赤	灰	白	軟	質	ロクロ未使用	"	"	小片16枚	
10-5	"	壺	底部	2.5×2.8×0.7	灰	灰	良	好	ロクロ未使用	"	"	"	右側に溝入、もろい		
11-1	"	壺	底部	7.2×7.5×1.3	淡赤	赤	灰	白	軟	質	ロクロ未使用	"	"	小片6点	
12-1	"	壺	底部	2.5×2.8×0.7	灰	灰	良	好	ロクロ未使用	"	"	"	小片13枚		
13-1	須恵器	壺	底部	2.5×2.8×0.7	灰	灰	良	好	ロクロ未使用	ケズリ	ハケ目				
14-1	須恵器	壺	底部	2.5×2.8×0.7	灰	灰	良	好	ロクロ未使用	ケズリ	ハケ目				

(3) 分布調査表探遺物目録-11

番号	種別	部位	大きさ			構成形	調査面			その他の 記載等の番号
			外	内	面		外	内	面	
14-2	土器	須恵器 頭	3.0×2.3×0.9			良	灯	タタキ	ケズリ	小片6点
1-1		須 恵 器 体	3.0×2.3×0.9	灰	灰	良	灯	タタキ、ハケ月	ハケ目	
15-2	"	須 恵 器 頭	5.5×3.9×0.7	"	"	"	ロクロ使用	タタキ、ハケ月	ハケ目	カーボン若土村苔
15-3	"	須 恵 器 体	2.5×2.6×0.5	"	"	"	"	ハケ目	"	外面上に馳
15-4	"	須 恵 器 頭	3.0×1.4×0.6	"	灰 白	"	"	ナデ、ハケ月	ナデ、ハケ目	
15-5	"	須 恵 器 体	2.2×1.6×0.5	暗	灰	"	"	ハケ目	ハケ目	
15-6	"	須 恵 器 頭	3.0×2.7×0.4	灰	白	"	ロクロ未使用	タタキ	ケズリ	
15-7	"	須 恵 器 体	1.8×2.0×0.2	黒	灰	"	ロクロ使用	ハケ月	ハケ月	外面上に黒釉
15-8	"	須 恵 器 頭	1.8×2.0×0.2	黒	灰	"	"	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	
15-9	"	須 恵 器 体	1.8×1.8×0.3	灰	白	"	"	"	"	
15-10										
15-11	土器	土器 体	4.6×3.4×0.7	にせい 橋	橋	良	野	ロクロ使用	ケズリ	ナデ
15-12			2.9×3.1×0.7	にせい 橋	"	歛	質	一	一	外面上にカーボン付着 研粒混入、透耗している
15-13	"	土器 体	3.4×3.0×0.4	淡	橋	にせい 橋	"	"	"	透耗がひどい
15-14										小片12点
16-1	須 恵 器	須 恵 器 頭	6.0×6.2×1.0	灰	灰 白	良	好	ロクロ未使用	ハケ月	
16-2	"	須 恵 器 体	5.0×3.5×1.0	暗	灰	"	"	"	"	
16-3	"	"	5.3×3.7×0.7	灰	"	"	"	タタキ	"	
16-4	"	"	4.1×3.2×0.7	"	灰 白	"	"	"	"	
16-5	"	"	3.5×2.5×0.6	"	灰	"	"	ナデ	"	
16-6	"	"	4.1×3.5×0.5	"	"	"	"	"	"	
16-7	"	土器	2.7×1.6×0.4	"	"	"	ロクロ使用	ハケ月	"	
16-8	"	"	3.0×3.8×0.4	浅	黄 橙	明	闊 底 やや收貯	"	"	
16-9	土器	土器 体	3.9×3.5×0.8	褐	灰	白	良	ロクロ未使用	ナデ	ナデ
17-1	須 恵 器	須 恵 器 体	2.2×1.2×0.4	明	褐	"	"	ロクロ未使用	ナデ	ナデ
17-2	"	土器	2.7×2.7×0.5	にせい 橋	"	"	"	ロクロ未使用	ケズリ	ナデ
17-3	七面器	"	"							
17-4										
18-1	"									
19-1	須 恵 器	"								
19-2	土器	土器 体	2.6×3.6×0.6	にせい 赤 橙	灰 赤	軟	質	ロクロ未使用	"	
19-3										
20-1	須 恵 器	須 恵 器 体	3.1×3.3×0.6	灰	灰 白	良	野	ロクロ未使用	ナデ	ハケ目
20-2	"	"	3.4×2.3×0.5	灰	白	"	"	タタキ	"	
20-3	"	須 恵 器	2.4×2.5×0.7	灰	灰	"	"	ナデ	"	
20-4	土器	"	"							
21-1										
22-1	須 恵 器	須 恵 器 体	3.9×3.5×0.8	褐	灰	白	良	ロクロ未使用	ケズリ	ナデ
22-2	"	"	"	赤	赤	橋	良	"	"	
22-3	土器	土器 体	3.2×2.2×0.4	赤	赤 橙	橋	良	ロクロ使用	"	
22-4	"	"	1.8×2.8×0.5	赤	赤 橙	橋	良	"	ナデ、ハケ月	ナデ、ハケ目
22-5	土器	土器 体	3.6×1.9×0.4	灰	白	良	好	ロクロ未使用	ハケ目	ハケ月
23-1	須 恵 器	須 恵 器 体	2.7×2.5×0.6	"	"	"	"	ロクロ未使用	タタキ	"
23-2	"	"	"							
24-1										
24-2	七面器	"								
24-3	"	七面器 体	2.8×2.6×1.4	淡	赤 橙	淡	赤 橙	良	"	
25-1	土器	土器 体	3.1×2.9×0.7	にせい 黒	"	"	"	ロクロ未使用	"	

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物盜掘下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集 仙台城（昭和42年3月）
第3集 仙台市熊沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集 史跡障壁国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集 仙台市荒巻五本松窓跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集 仙台市宮沢坂町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集 仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集 史跡逸見塚古墳環境整備子備調査概報（昭和51年3月）
第12集 史跡逸見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集 南小泉遺跡一範囲確認調査報告書一（昭和53年3月）

仙台市文化財調査報告書第13集

昭和52年度

南小泉遺跡範囲確認調査報告書

昭和53年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育部

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 022-646640



東洋電機ソリューションズ